



TITLE:

人文 第2号

AUTHOR(S):

---

CITATION:

人文 第2号. 人文 1971, 2: 1-44

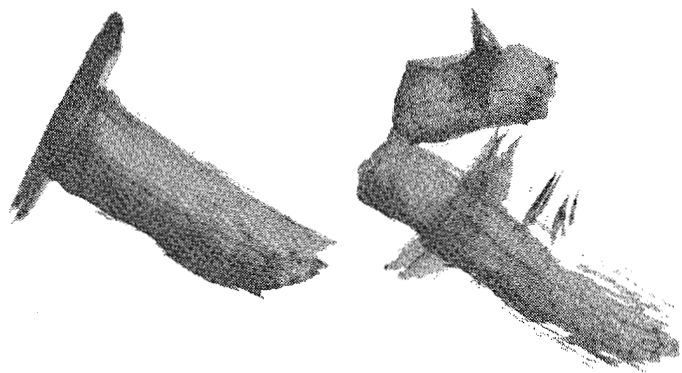
ISSUE DATE:

1971

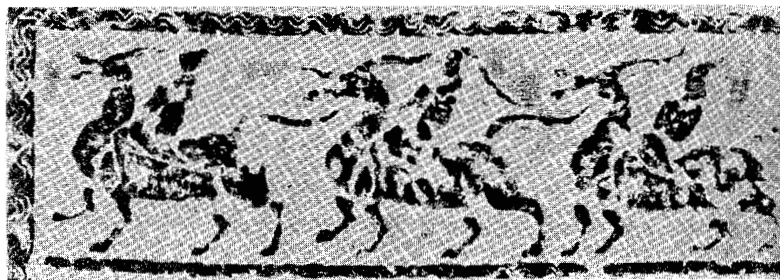
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57128>

RIGHT:

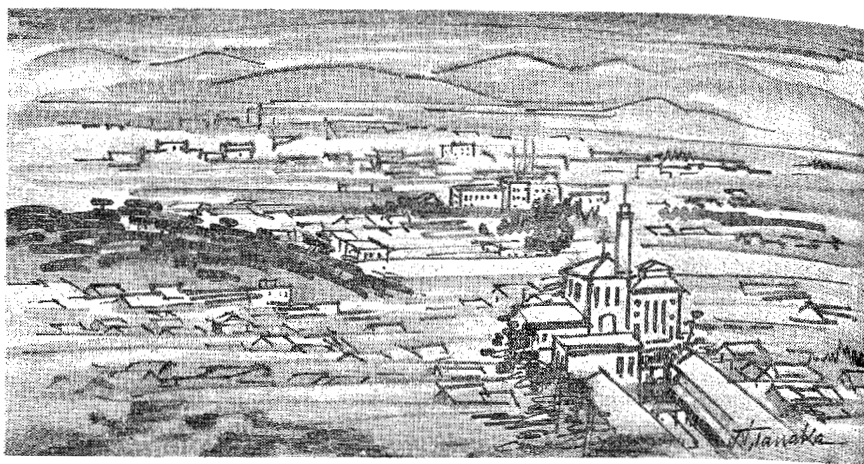


第二号



1971

京都大学人文科学研究所



# 人 文 第 二 号 1970年 7月-12月

## も く じ

### わたしの考え

ジュンテツと人文

上山 春平

(1)

### 講 演

#### 夏期講座

官僚文化

磯波 護

(4)

中国文化の特質

山田 慶児

シニメルとミケーネ

前川 和也

数寄と恋愛

多田道太郎

形と色

吉田 光邦

日本文化の東と西

林屋辰三郎

開所記念日公開講演会

三宅 一郎

(10)

政党支持の流動性と安定性

中村賢二郎

十六世紀ヨーロッパの異端運動

福永 光司

無用の用

福永 光司

(15)

### 書 評

太田武男編『現代の離婚問題』(三宅一郎)・桑原武夫編『ルソー論集』(樺山紘一)・森鹿三『東洋学研究 歴史地理篇』(梅原郁)・会田雄次『日本人の意識構造』(井上忠司)・飛鳥井雅道『近代文化と社会主義』(竹内成明)・飯沼二郎『歴史と風土』(石毛直造)・井上清『西郷隆盛』(島田虔次)・吉田光邦『星の宗教・自然と人間シリーズⅢ』(橋本敏道)

### 共同研究のうごき

・家族問題の研究／日本文化の研究／社会科学における電子計算機の利用

・朱子研究／漢代文物の研究／敦煌写本の研究／科学者列伝の研究

・異端運動の研究／理論人類学の研究

旅だより

アフガニスタンから

田中 重雄

(24)

ヨーロッパから

藤枝 晃

書いたもの一覧

(一九七〇年七月-十二月)

人のうごき (14)・外国人研修員 (15)・編集後記 (16)

カント・田中重雄

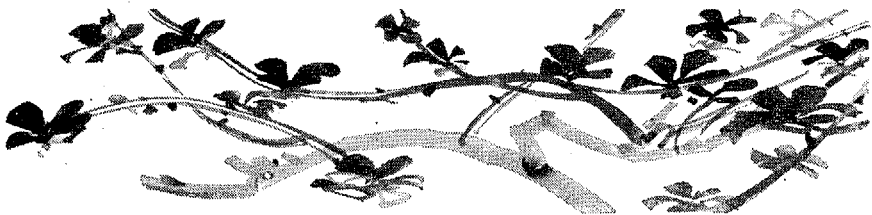
## ジュンテツと人文

上山春平

私は、まえまえから、「あなたの御専攻は」という質問がにがてである。どうも、スラと答えにくい。ちかごろでは、めんどろになって、「哲学」と答えることにしているが、それ以上切りこんでこられると、当惑してしまう。とくに、専ら攻めている（もっぱらおき）といったものがないからであり、とくに、何かを専ら攻めたいとも思わないからである。

私は、いわゆる「ジュンテツ」の出身である。これは「純粹哲学」の略、正式な講座名

ではないが、そう言いならわしている。元来、「哲学」というのは、明治につくられた訳語の一つで、「学」という字がついているが、もとのことばでは、ただ、「智慧を愛します」という主観的な愛情の表明にすぎない。そうした愛情の表明を最も純粹に行うのがジュンテツなのだ、といえばきこえはいいが、学問の分業化の趨勢のなかで、そんなのんきなことが言っておられるのかどうか。少なくとも、「職業としての学問」の一角を占めるには、



はなはだ不適當なしろものと言わざるを得まい。

私が人文にやってきたとき、ここにも哲学科出身のスタッフがいなかったわけではないが、坂田吉雄さんは倫理学、平岡武夫さんは中国哲学、といったぐあいに、同じ哲学でも、攻める対象がはっきりしていて、おそらく、「御専攻は」ときかれて、ドギマギした体験などお持ちあわせにならないに相違あるまいと思われた。

人文に入ったばかりのころは、それぞれの明確な専門領域をもつ人びとのなかにまじって、何とか自らをいつわって専門家めいたふるまいをせねばなるまいと思ひわづらったこともあったが、いつのころからか、人文ほどジュンテツをやるに向いた環境はないのではないか、などと、いささか居直りめいた思いを、しみじみといだくようになった。

むかし読みかじったゲーテのことばに、「私は、自分のすべての活動と成果を、つね

にただ象徴的にのみ見てきた。したがって、私が瓶をつくるか、皿をつくるか、ということは、私にとってほとんど無関心のことに属した」というのがあったが、これはジュンテツ出身者のドキマギ鎮静剤には、もってこいの良薬、あるいは麻薬である。

人文に来て、桑原武夫さんや今西錦司さんのような寛容な名匠に導かれて、瓶をつくり、皿をつくっているうちに、私は、そのつくるとなみのうちに、ジュンテツの実践の場、たんなる借りものの理窟をつぎはぎする空論ではない真剣勝負の場があることを見いだして、問題は攻める対象ではなく、攻めるとなみそのものにある、といった一種の自己正当化のロジックを身につけてしまったらしい。いまは、田中謙二さんの主宰される朱子語類の研究チームに首をつっこんで、中国学の名匠たちに教えを受けているが、これからもいろいろな瓶や皿をつくりつつゆきたいと思いますので、老若の名匠方、宜敷。



## 講演



### 夏期講座

(昭和四十五年度)

八月一日―三日 於 本館ロビー

## 官僚文化

磯波 護

官僚文化という題は、一般になじみの薄い言葉である。しかし、前近代の中国文化の特質をひとくちに言いあらわそうとすると、官僚文化とよぶのがもっとも適当なのである。この社会にあつては、官僚は、単に政治の担当者であるに止まらず、その時代の文化の担い手であつたからである。

中国社会の永続的な側面を性格づけるものの一つとしてその官僚制に着目し、それを家産官僚制の範疇によつて特徴づけたのは、マックス・ウェーバーであつた。このウェーバーの中国社会観に触発されて中国史

の研究をはじめ、ヨーロッパにおける中国社会経済史研究の開拓者となつた元ソルボンヌ大学教授の故エチエンヌ・バラシュ(一九〇五―六三)の代表論文十六篇が『中国の文明と官僚制』という標題で出版されている。この書物に収録されている「中国の恒久的官僚制社会」と題する論文においてバラシュは、中国の巨大な農業社会が文人官僚によつて支配され、性格づけられていたことを確認するとともに、ヨーロッパの啓蒙専制主義の時代と、宋に始まる中国史の一時期との間には、ほとんど完全な対応関係がみられる、と述べている。家産官僚制を、中国史の全時代を通じた特色として類型的に扱えたウェーバーに対し、それはとりわけ宋以後の中国社会の性格であるとみるバラシュの見解は、かれ自身の実証的な個別研究と、日本人による中国史研究の成果を踏まえた結論なのであつた。

唐代以前の、生まれを原理とする閉鎖的な身分社会、貴族社会にかわつて、宋代には教養能力を原理とする開放的な階級社会、士大夫社会が誕生した。文化の担い手たる官僚の性格が一変した。官僚文化とよぶにふさわしい中国文化は、貴族文化から士大夫文化へと変貌したのである。

これまで、中国社会とヨーロッパ社会とを何かにつけて対照的にみる傾向が強いが、唐以前の貴族制の時

代についていえば、ヨーロッパとの類似性をより強調すべきであろう。たとえば、中国における相統制度は、漢以後現代にいたるまで、均分主義が殆んど例外なく一貫している、とされてきた。建前としてはそうであったとしても、実際は貴族社会にあつては均分主義はくずれ、単独相統制が支配的であつたと考える方が自然ではなからうか。建前としては末端まで貫徹されていた筈の皇帝権が、実際には貴族勢力（仏教教団をふくむ）により中断されていた時代だったのであるから。

## 中国文化の特質

山田 慶児

中国人は科学といえるようなものを生みださなかつた、というのが長いあいだの定説あるいは固定観念であつた。しかし、それがいわれのない偏見であつたことを、最近の研究はしだいに明らかにしている。だが、偏見はまだ根強い。そうした偏見を打破するには、すくなくとも二つの点をはつきりさせておく必要がある。

一つは、科学とはいったい何か、という問題である。

科学は近代になつてはじめて生まれた、というのも一つの立場であるし、それなりの有効性をもつ。しかし、近代科学の成立にあたつて、ギリシア人、アラビア人、中国人そのほかの諸民族がどんな寄与をしたか、という問題を考えるばあいには、その概念規定はせますぎる。まして、それぞれの社会において、自然を認識するどんな活動をおこなっているかを研究するばあいには、いうまでもない。

も一つは、中国人がどんな概念と論理をつかつて自然を認識したか、という問題である。その特質を理解せずに、安易に近代科学の概念や論理でおしはかると、科学に欠けている、という結論にみちびかれる。しかしそれでは、実験的方法が中国人によつてはじめて自覚的に適用された、という事実さえみすごしてしまうことになる。概念や論理の特質は、自然言語の特質にふかく結びついている。したがつて、文化の特質ともふかくかかわっている。

講演でとりあげたこの二つの問題は、その内容を敷衍して、「パターン・認識・制作——中国科学の思想的風土」（広重徹編『科学史のすすめ』筑摩書房）という文章に詳しく論じた。それを参照してくださるよう希望する。

## シュメールとミケーネ

前川 和 也

この報告では、古代シュメールおよびミケーネ両社会の構造を、比較類型論的に把えてみた。一九五二年、ミケーネ線文字B粘土板文書が解読されて以来、古典古代ポリス社会の成立を単線的に論じることが不可能となった。ポリスの成立にさきだつ前二千年紀後半のエーゲ海沿岸のギリシア人諸王国は、よりオリエント的、デスポティックな性格をもっていたのではないかと考えられるようになったからである。ここでどうしても、このミケーネの王国とオリエント世界、とくに同じく粘土板行政・経済記録を最初に生み出したシュメールとの比較作業が必要不可欠となる。そしてわが国では、太田秀通氏が線文字B文書（とくにピュロス文書）の分析を進められ、メソポタミアと対比しつつ、ミケーネの王国の社会構造を論じて来られた。

この報告は、太田氏の問題提起を受けながらも、逆にミケーネ社会と対比しつつ、シュメール社会の構

造を把握しようと試みたものである（報告は加筆して『人文学報』32号に収録）。ここでは両社会における王室奴隸制、家畜貢納・飼育、農業生産、集団労働体制をそれぞれ考察しながら、最後に両社会の王権を対照的に理解するという手続きをとっている。報告では以下の諸点が指摘されている。まず第一に、前三千年紀のメソポタミア最南部シュメールにおいては、高度の農業生産力とそれにかかわる集団労働体制が王権とまず密接に結合し、しかるのちこの農業生産力を背景として、大規模な家畜飼育と王室奴隸制が發展した。これにたいしミケーネでは、おなじく大規模な王室奴隸制が成立し、また王権は支配下の村落に大規模な家畜貢納を強制するが、それは農業生産・集団労働との連関性より由来するものではなかったと考えられる。すなわち、この報告では、両社会における農業生産の相違、ひとつには農業生産力のきわだった違い、ふたつには生産における集団労働と個別労働の違い、が両社会を基本的に識別せしめる特質として強調されているわけである。

そして報告では最後に、ヴェーバーの古代社会発展にかんするシューマを利用しながら、シュメール都市国家を賦役王政ないし貢納・賦役王政と規定し、ミケーネ的王国と対比させてみた。同じく粘土板文書が利



用されるこの二つの古代社会を、それぞれ極限的に対照化・類型化してみるとというのが、この報告の背後の意図である。

## 数寄と恋愛

多田 道太郎

恋愛には彼岸的性格がある。西洋の恋愛に共通の性格は「のぞみと渇きにあえぐ心」（ヘルナール・ド・ヴァンタドゥール）である。西洋古代にも、もちろん激烈な異性愛はあったが、それらは狂気の一環とみなされていた。十二、三世紀のフランスにおいてはじめて、恋愛は彼岸を志向する宗教的性格を帯びる。

ドニ・ド・ルージュモンの『恋愛と西洋』は、カトリ派という異端が抑圧された彼らの神を歌うために、異性に想いを仮託したのだという仮説をたてた。すなわち、トルバドゥールの詩にあつては、恋愛とは神に呼びかける暗号通信であり、恋人とは神の記号であつた。

恋愛のこうした超越的性格は、近世近代ヨーロッパ

に固有のものと考えられている。たしかに、もう一つの文明圏中国においては、男が女にかなわぬ恋の歎きを訴えるということはみられない。しかしわが国の平安時代にみられる好色（すき）は、恋愛の彼岸的、超越的性格をそなえているように思われる。常世信仰がくずれ、死の影が愛の中にしのびこむ。人びとは、愛のなかに、失われた古代の心を求めたのではないか。

ところで、茶道という数寄は、この平安の好色の流れを汲むと私は考える。好色は「かぎりなきすき」（後鳥羽院）であり、数寄もまた「ひたぶるの執着」という意味である。茶のにじり口（切戸）は、上代の妻問いの喚起であつたと思われる。

茶道がその歴史の中で、たびたび先縦にたいする否定を見るのは、無限の渴望をその源流においてもつゆえである。

しかし、西洋における恋愛が、自由、平等といった政治的、法的理念に転化するのに対し、わが国の「すき」は、佗びやいきといった美的、感覚的規準に転化した。そのそもそのきっかけは、「好色」が社会的規範になることなく、茶具足愛という即物的、感覚的な「数寄」にうけつがれていったところに求められる。

## 形と色

吉田光邦

アンリ・フォションに「形の生命」なる一書がある。彼はこのなかで芸術作品の形をとらえ形の現象学を展開する。形は空間領域にあるものであり、生命活動の様式であり、ひとつの象徴体系でもある。こうした見地から彼は空間、素材、精神、時間についての詳論をくりひろげる。

フォションのこの考えは、量と形で自然を決定しようとしたピタゴラス、さては世界を構成する原素を幾何学上の正多面体に対応させ、天体運動を球の組合せによって説明しようとしたプラトンにまでわたしたるをひきもどす。そしてローマのウイトルウィウスは、さまざまな数的比例によるカノンを設定して、コルビュジエの先駆者となった。

だが中国の自然学の根拠となった五行は、すべての世界の現象のなかに対応を発見する。しかしそのなかには幾何学的図形は見当らない。そして空間はそれを

充す実体としての色によってとらえられた。西の形の現象等に対して東の色の現象学は可能であろうか。漢の劉熙の「釈名」は色を物の象徴とする。色の変化はそのまま実質の変化であった。それは色を支える呪術思想の延長の上に成立する。それが呪術と分離したとき、色の認識は新しい体系を生む。これが東における美術の特質として存在してきたのではなかったか。

十九世紀までのヨーロッパの写真画は、合理的な幾何学的空間と物に対して、共通の認識が存在することを前提としてきた。この前提が極限にまで到達したときキュビズムが生れる。同時にこれに対する新しい反逆は、色のハーモニーを唱えるカンディンスキーに現われた。そして現代では幾何学的世界と精神こそ現代の危機の根源とみなし、幾何学原理からの自由な解放を叫ぶニューマン（一九五八）にまで至っている。それらはまさしく形の現象学に対して、色の現象学を求める現代の動きであろう。

## 日本文化の東と西

近世文化の黎明

林 屋 辰三郎

日本のような細長い列島の社会では、早くから東北の部分と西南の部分に、風土をはじめさまざまな点での相違があり、文化の上でも対立的な関係がつくられた。狩猟、漁撈を中心とした縄文式の文化と、農耕を主軸とした弥生式文化との歴史的、継起的な文化の相違も、東と西という地域的な対立関係として考えることが出来るであろう。さらに古代から律令社会の状況を見ると、東は馬、西は船を情報とした文化として理解される。「南船北馬」流に云えば、日本は西船東馬である。東の倭馬の党、西の海賊は、古代の内乱の因由をなしたとともに、古代国家としてはその糧道としての重要な意味をもっていた。

この西船東馬から発展するものは、西の貿易に対し東は武士団であり、「ぜに」と土地という価値基準の相違であった。そして黄金国とみなされた日本からは、陸奥の金を宋におくり、宋からは銅銭を入れると

いう取引の基本型が生れてきた。金の輸出は元から南宋への経済援助とみなされて、蒙古来襲の因由をつくり、銅銭の国内流通は農村の生活向上を生んで、御家人社会の解体へとつながって行った。土地主義はしだいに「ぜに」主義に圧迫されはじめる。

このようなうごきは、政治の上でまず日宋貿易を基盤とする六波羅政権を生み、そのあとで、御家人を基盤として創出された鎌倉幕府もついに打倒されてしまう。それをうけつぐ室町幕府は、もはや東の土地文化ではなく、西を中心に日明貿易の上に成立した。そしてそのもとで京都を中心に、国際的視野の拡大、貨幣流通の展開、そして新しい市民層の抬頭といった、近世文化の黎明期の特徴が現われてくる。

しかし天下の一統がめざされてもお、根底にある東と西との対立は容易に解けず、関ヶ原合戦が東西分け目という形でたたかわれ、そのあとようやく生み出された統一政策のなかにも、東の金ずかいに對する西の銀ずかいなど、通貨の対立があり、それは元禄（上方）、化政（江戸）の文化の隆替にも、大きく影響をもたらした。

そのようななかで、「藩」という存在は、幕府の当初から幕藩体制というように存在したのではなく、むしろ江戸中期以後、お国やお家と考えられた各地方

の自立的意識と經濟的發展のなかで、しだいに意識されたものであり、近代的一統の基礎づくりを果したものと考えられる。その意味で明治維新の動乱も、藩（まがき）の中心に幕府を置くか天朝とするか、東北の列藩か西南の雄藩かという形で争れわることになったのであろう。

この日本文化の東と西の問題は、東西の距離が新幹線三時間に短縮された現代においてなお部落問題の認識を一つをとっても基本的な相違がある。そのような奥深い問題としてここに研究の課題として提供したい。

## 開所記念日公開講演会

昭和四十五年十一月十四日

於 分館ホール

## 政党支持の流動性と安定性

三宅 一郎

二、三年という比較的短かい期間に限っていうと、政党支持は集団のレベルでは安定しているが、個人の

レベルでは流動的である。新聞社の調査による政党支持の分布を時系列に並べて見ると、隣り合う二つの分布の間の差はせいぜい数%にすぎない。ところが、同じ標本にたいして繰返して面接調査するいわゆるパネル調査の結果から、数カ月から一年ほどの期間ではやはり分布は一定ではあるが、全体の二、三割もの人が政党支持を変えることがわかつている。この現象はペネル期間の長短にはあまり関係なく、また、一定の方向に大きく動くわけではなく、保守―革新間の変化がほぼ吊り合っているとさえいってよい。

確率モデルはこのような現象を整理するのに恰好のモデルである。政党支持（広くは態度一般）の変動に適用される代表的な確率モデルは、回答確率モデルとマルコフ連鎖モデルの二つである。回答確率モデルは個人の回答が特定の確率現象となつていると見る。各人の回答の確率はそれぞれ異なっているはずだが、便宜のため、各個人が確率を同じくするいくつかの（潜在的）クラスに分れており、調査期間中は個人のクラス間の移動はないとすることが多い。この点、ラザースフェルドの潜在クラスモデルと類似しているので、潜在クラス型とも呼ばれる。その時々々の回答は変わっても回答の背後には変らないあるもの（潜在構造）を想定しているわけで、この潜在構造を明らかにすること

がこのモデルによる分析の目標となる。

これにたいし、通常マルコフ連鎖モデルは安定したあるものを想定せず、変化をより重視し、この変化のシステムとしてマルコフ連鎖を考える。すなわち、回答時における個人の「状態」の変化を、回答の変動因とする。したがって、より動態的という点ですぐれてはいるが、その反面、マルコフ過程の前提と政党支持の変化とが理論的に一致するかどうか、変化のシステムが全標本を通じて一定だとするのは現実的でないのではないかという面で問題がある。

以上の二モデルの複合モデルを考えることもできる。個人の属するクラスを常に一定だとしないうで、個人は潜在レベルでのある変化システムにしたがってクラスを変えるとし、この変化がマルコフ的だとするのが、コールマンのモデルである。回答確率と「変動」とを分離してとらえることができるという点ですぐれたモデルとなっているが、潜在的状态の変化のシステムをマルコフ的だとするので先述のマルコフ型モデルの問題点を含む。

現在私は、二重潜在クラス型モデルを考えている。右のコールマンのモデルで潜在レベルにおける変化のシステムをマルコフ的としないうで、さらに一段下の潜在レベルでの所属クラスによると見る。逆方向に説明

すると、まず各個人は政党についての判断を下す軸あるいは領域を思い浮べ、次にその軸あるいは領域によって政党についての判断を下すという二重の決定過程を想定するわけである。将来このモデルにそって経験的データを分析してみたいと計画している。

## 十六世紀ヨーロッパの諸端運動

中 村 賢二郎

宗教改革時代のヨーロッパには、カトリックとだけでなく、プロテスタントとも対立するさまざまな宗教運動が現れている。それらは近年「宗教改革の左翼」「急進的宗教改革」という呼び方で括くられることが多いが、それらは多かれ少なかれ中世末期の異端運動の流れの中に位置しているので、「異端」と呼ぶことも許されるだろう。そしてまたそうであるだけに、それらを考察することは、ヨーロッパの異端運動一般を理解していく一助となるだろうと考えている。

ここで取り上げるのは、それら宗教改革時代の「異

端」のうちの再洗礼派だけである。再洗礼派とは一五二五年頃チューリヒでツウィングリ派の中から分派として形成され、その後モラヴィアからドイツ、ネーデルラントにかけて広がった当時最大の宗派であるが、モラヴィアのフッター派を一応別とすれば、同じ宗派に属しながら、従来から、スイス系の再洗礼派とネーデルラント系の再洗礼派との相違が強調されてきた。スイス系のそれは「群狼中の羊」としての受難が真のキリスト教徒の運命とし、いかなる圧迫に対しても武器をとって反抗することを認めない Pacifism の立場をとるのに対して、ネーデルラントのそれは、一五三四―三五のミュンスターの「新しきイエサレム」王国の樹立に示されるように、武力による蜂起と千年王国説とを特徴としているからである。しかしそのような相違にもかかわらず、両者は、より深部では大きな共通性をもっていたのではないか、というのがここで述べたい眼目である。

スイスの再洗礼派は上層市民の出身であり、インテリでもあった人々によって形成されたことから分るように、特定の社会的指向性をもつものではない。しかしその教説は、政府は非キリスト教的で悪なる存在であり、軍役を行ない、官職につくべきでないという政治倫理をふくんでおり、根底的には反政府的な立場

に立っている。千年王国説に立って武力による神の王国の建設をとくネーデルラント系再洗礼派とは、積極的と消極的の差はあれ、スイス系再洗礼派も反政府的という点では共通している。両者がともに下層市民、農民に多く流布したのは、そこに大きな理由があったと考えられるのではないだろうね。

## 無用の用

福永光司

「無用の用」の「用」というのは、役に立つ、使いみちがある。価値をもつという意味である。したがって「無用の用」は中国哲学における一種の価値論としての性格をもつ。

ところで価値は一つの選択であり、人間の行動は価値を選択することによって成り立つが、選択とは一つを選ぶことによって他を切り捨てることであるから、甲を価値（用）とすることは乙を無価値（無用）として切り捨てることでもある。この場合、一つの社会や文明の中で、価値として選択されたものを重視する方

向と、無価値として切り捨てられたものに注目する方向とが成り立つが、「無用の用」は後者の方向に切実な関心をもつ哲学である。そして、政治とは選択された価値を「公」として、それを現実の社会に具現させるいとなみであるが、捨てられた価値に注目するのは「公」を批判する「私」の立場であり、前者を正統の思想とよべば、後者は異端の思想ということになる。「無用の用」は「私」の立場に立つ哲学であり、異端の思想であり、文明批判の哲学としての性格を顕著にもつ。それは公的価値によって切り捨てられたもの、社会の谷間にうずくまるもの、常識から見捨てられ、抹殺されたものに目を向ける思想であり、支配者の立場に立つ哲学、エリート思想ではない。

「無用の用」という言葉（思想）が、中国の文献で始めて見えるのは、西暦前四世紀、ギリシャのアリストテレスと時を同じくする荘周の著作『莊子』であるが、現在の『莊子』がテキストとして新古の層を含むように、「無用の用」の思想もまた、その中に變化發展の跡が指摘される。配布したプリントでいえば、(一)の文章は、無用が有用である——世間の常識で役に立たぬとされるものが実は却って役に立つという価値の転換を説いたものであり、(二)の文章は有用が無用である——世間の価値観で有用とされるものも、本当の

意味では有用であるとは限らぬという文明批判的な視野を導入し、(四)の文章では有用は無用によって支えられ、無用は有用の根底をなすという思想が、(五)の文章では、真に偉大な有用——天地造化の「道」のはたらし——は人間の常識的な価値観で計られた有用と無用を超えるという哲学が説かれている。

『莊子』の中に見える「無用の用」には、このように力点の異なった幾つかの思想表現、原初的なものと後次的な展開を示すものとの相異などがあるが、これらをひっくるめて、この思想がどのような論理の構造と哲学的な意味をもつのか、そのことについて次に二三の点を説明することにする。

第一は、「無用の用」が、「無為の為」「無言の言」「無形の形」「無声の声」などと同じく、老莊哲学の基本的な思考と論理のパターンを示していることである。ここでは初めに先ず「用」や「為」「言」などが否定されている。先行するものは、それらの現状に対する批判であり、それらがあるべき状態にない、ごまかされている、真でなく偽であるという批判と否定である。中国の哲学で「真」という言葉を初めて用いたのは老莊であるが、老莊の哲学は文明や社会の「偽」を批判し「真」を問うところから出発する。

第二は、「無用の用」においては「用」という言葉

が二度用いられているが、上の「用」と下の「用」とは意味の次元を異にしている。上は否定されるべき偽の用であり、下は偽が否定されることによって実現される真の用である。

第三。「無用の用」で重点は下の「用」にある。「無用の為」が手をこまねいて寝そべる怠情を強調するのではなく、真の為（為さざることなき偉大な為）を問題とするように、「無用」もまた真の用——根源的な価値——をあくまで問題にする。

第四。「無用の用」の哲学とは、「用」と「無用」とが分ち難く結びついていることを教える哲学である。人間が人間として生き且つ存在しうるのは、有用によるのであって無用によるのではない。しかし有用は無用との連関性を絶ち切られれば萎縮してしまうのであり、たえず無用に帰ることによって真に創造的な有用性が生まれることを「無用の用」の哲学は教える。換言すれば用と無用の根源にあるものは「道」であり、「道」によって此の世に存在する人間の生命である。「無用の用」の哲学とは、人間の生命を至高の価値として社会を考え、政治を考え、科学技術を考えてゆく文明批判の哲学である。

## 人のうごき

井口和起助手（日本部）は、辞任（四五年七月一日付）の上、大阪外国語大学（講師）へ転出。

荒井健氏（橘女子大学助教授）を助教授（東分部）に採用（四五年八月一日付）。

愛宕元氏を助手（東洋学文献センター）に採用（四五年八月一日付）。

副島四照氏を助手（日本部）に採用（四五年二月一日付）。

内井惣七助手は、ミシガン大学より四五年六月に一旦帰国して、八月二五日より同大学へ留学。

山下正男助教授は、ハーヴァード燕京研究所へ四五年八月七日より出張。

田中重雄助手は、京都大学第二次中央アジア學術調査隊に参加のため、四五年七月二一日大阪港発、ナホトカ、サマルカンド経由、アフガニスタンに向った。

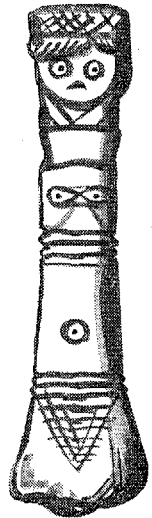
藤校晃教授はコペンハーゲン大学客員教授として、四五年八月二二日発、十二月二七日帰国。

飯沼二郎助教授は、オーストラリア・キャンベラで開かれた第二八回国際東洋学者会議出席とオーストラリア農業視察のため、四五年一月二七日大阪空港から出発した。



# 書評

## 太田武男編 『現代の離婚問題』



(A5判、四八四頁、有斐閣)

法学者と社会学者などの社会科学者との共同研究は、その他の組み合わせの場合に比較すると難かしい。法学、とくに法解釈学は特殊な学問体系を構成しており、しかもそれは高度に発達したもので、素人が容易に入り込むことができないという事情がその理由の一つである。だから共同研究に参加した法学者が法社会学や法制史などの立場に徹底せず、自分自身の言葉で語ろうとする限り、まず法学的観点と方法についての啓蒙から始めねばなるまい。法学に対する無智と偏見からくる法学への蔑視がときに見られる当研究所で、このような啓蒙活動は意義なしとはいえないが、法学としてのレベルは落さざるをえないし、相互にどれだけ裨益できるかも疑問である。

このような困難性のために家族問題の研究も、終戦直後の啓蒙期を別とすれば、法学者のグループと、社会学者を中心とするグループに分れて別個に進められてきた。しかし、かつて京大で教鞭をとったレーベンシュタイン教授の言を借りれば「その逆は必ずしも真ではないが、私法学者にとって社会学、経済学などの学習は必須である」し、他方、社会学者の側にとつても明治民法による「家族制度」の法制化と戦後の民法改正によるその解体が示すように、法制度の規制力を見逃しては研究を正しく進めることができない。人文研における家族問題の研究班が「法律学的観点からの考察を中心にしながらも、社会学、心理学、社会心理学、倫理学、人類学などの他の専門分野の観点からの考察を

も」行なつて、「現代の離婚問題」という報告書を刊行されたことは、まず評価されるべきであらう。

さて、この書は、社会学者など非法律家の論文を納めた第一部、離婚の実態分析の第二部、法律学者の論文を集めた第三部の三部よりなる。

第一部「現代離婚問題の社会的背景」は五論文を含むが、論文を一つ一つ紹介する余裕はないので、法学と他の社会科学との協力という文脈に限ると、この中で井上忠司氏の「戦後における離婚観の変遷」が興味を惹く。この論文は離婚に関する法学の四つの学説、「婚姻非解消主義」「有責離婚主義」「救済離婚主義」「破綻離婚主義」を社会学的見地から再構成したという結果になつていて、非法学者から法学への寄与だといえよう。

第二部「離婚の実態」に入っている論文は田中泰子氏の「地域社会における離婚の実態」ただ一篇だが、本書で最長の論文であり、第一の力作のようだ。この論文は京都市の各区役所で

受理された離婚届と添付書類の社会学的分析であつて法学者の手によるものだが社会学的分析としても水準が高い。

第三部「離婚をめぐる法律上の諸問題」に属する八論文の中では、明山和夫氏の「離婚と子供の問題」が単なる法学的アプローチをこえて興味深い論文であるが、何分にもデッサンに終っているのが惜しい。

こう見ると、班員の数年にわたる努力にもかかわらず、法学者と他の社会学者との共同作業は「結果的には必ずしも理想的なものたりえ

## 桑原武夫編 『ルソー論集』

(A5判、四四三頁、岩波書店)

ジャン・ジャックの何が東洋人を魅けるのであろうか。わが国のおびただしい数のインテリがかれについて、あるいはかれに託して多くを語ってきた。人文科学研究所を中心とする研究グループは、戦後わが国にあつてその文字とおりのリーダーであつた。今回の『ルソー論集』は、従来のわが国の研究が参照しえなかつた新資料と文献を利用している。またルソー研究者を絶えず悩ましてきた、いくつかの論争点への積極的な取組みがある。たとえば「不平等

ず、現代の離婚問題に関する個別的な論文集成のようなものになり終つて」いるのは残念である。この班に参加している法学者たちは「内縁の研究」(近目刊)というすぐれた共同研究をもととしているだけに、解釈法学者は共同研究ができないというのではなく、法学者と他の社会学者との共同研究が難かしいのであろう——というところで小論は冒頭に戻つてしまつた。

(三宅一郎)

起源論』『エミール』と『社会契約論』との間にある不整合は、どう解釈されるか。樋口論文の視角は、これについての示唆に富んでいる。あるいはまた「はしがき」で編者が自負するよう、新たな領域の開拓が果たした役割も大きい。黄宗羲、安藤昌益、中江兆民とルソーとの一致と影響を論じて、東西の思想の独特の並行を論じる桑原論文。自然法と一般意志論を記号論理学の手法によつて分析する内井論文。明治以後わが国に紹介され、大正自由教育思想に潜

入した、エミールの思想を追跡する松田論文。これらはいずれもルソーに全く新たな光を投げかける、貴重な仕事と言ふべきであらう。

さて十三編にのぼる『論集』の個々の論旨を、ここで検討するわけにはいかない。むしろ私は、この研究グループが、メンバーの出入はあれ、一九五一年の『ルソー研究』(第一版)以来たどつてきた、その軌跡にあこぎな興味を感じている。『研究』当時三十路に及ばぬ新進気鋭は、今や初老の大家を成す、という年月のはざまに、このグループは、いささかの思想の変換を経たように思われるのである。イデオロギーと方法の相違とははなれて、異なる分野の研究者が、オーソドックスな態度で、単一の対象に立向つた『研究』。他方これにたいして、『論集』は「はしがき」も言うように、一見しては共同研究としての等質性を欠くかに思われながら、しかし別個の同質性が底を流れている。現代の思想と社会に対する問題性の共有とも言えようか。

概念の涸渇、思考の硬着——国の彼此を問わず、イデオロギーと政治的党派の左右を問わず、むしろそれを貫いて遍満する——への鋭い批判の意識。現代にあつては、この批判は独自の思想的立場につながる。西川論文が取扱う「革命」、樋口論文の「自由」、作田論文の「共通連帯性と相互補完性」など。これらはい

ずれも、古い概念の固着と硬化からの救済を、ルソーに託して語っている。そこに二百年の時空を距ててなお顯われる、ルソーの眞の現代性がある。竹内論文の直截な現代批判も、こうした認識の共同性のもとで安定している。

『研究』と『論集』の間にはまだ違いがある。前者は一九五一年という時点で、ルソーに近代市民社会成立の眞の論理を見わけようと努めているように見える。ところが『論集』はすでに明白に、市民社会への批判を見る。それには現代の問題性への応答としてである。さらには、成立した十九世紀市民社会論の展開に對してもつ、ルソー主義の意味としてである。

### 森 鹿三 『東洋学研究—歴史地理篇』

(A5判、五四五頁、東洋史研究会刊)

「性懶惰のため単刊の著書を持たぬ」と謙遜される森先生ではあるが、長い研究所生活をおえられる記念にもと、日比野丈夫氏を中心とした森博士定年退官記念事業会の手によって編まれたのが本書である。

ここに収録された四十篇は論文・割記・紹介・概説と、精粗・長短すこぶるバラエティに富み、東洋学という表題を冠するにふさわしい。それ

阪上論文がブルードンに、上山論文がマルクスに對比を求めているのは、思想史の新たな題材として興味深い。十九世紀における市民社会論の展開と、それへの批判は今後ますます重要な論考の対象になるであろうから。このグループを中心にその後、十九世紀社会思想の研究が本格的に開始されているとも聞。その研究の成果を土台に、仮に再び『第二ルソー論集』が書かれるとしたら、ルソーはそこには如何に映るであろうか。これは思想史学に関わる者の抱く、けだし当然の期待であろう。(樺山紘一)

とて、著者の専門の歴史地理という最大公約数で括れるものに限られ、漢簡、本草、書誌学関係の論文は別の機会にまわされざるを得なかった。また副題の歴史地理は、内容によっては歴史と地理の二つに考えることもできそうである。歴史地理学の必要条件の一つは、金田先生などは御嫌いであろうが、博覧と強記である。今更喋々するまでもなく、著者は誠に中国四千

年、横にあの広大な地域について、現在ではちよつと比肩する者なき博識を具えられ、「知りすぎた先生」と畏怖されるほどである。巻頭の「竹と中国古代文化」の縦横の論旨展開、「唯水史観」の卓抜な著想などは、こうした博識あつて初めて生まれる秀作であろう。特に後者は、秦の始皇帝の統一事業と五行思想の水徳の關係を論じた有名な論文だが、行論中、「易の八卦の呼び名の字中に、各卦が隠されており、それから推論すると、易の整備されたのは秦代でなかったか」と指摘される件りは、先年、郭沫若氏に膝を叩かせたと著者が自慢されるだけの爽快な切味である。

森先生がライフ・ワークとして、研究の基軸にすえられたのは、中国全国の水系に従つて地理を叙述した、北魏酈道元の著『水経注』である。本論集でも、比較的初期の問題作「戴震の水経注校定について」をはじめ、七篇の關係論文を数えることができ、他の論文でも重要なポイントにはしばしば『水経注』が使われている。ただこれら『水経注』關係の諸論文は、むしろ『水経注』研究の手びきのためのものが多く、著者の該博精緻な水経注研究の全貌を窺うにはやはりもどかしさを感じる。著者はその知識の豊富さゆえに却つて慎重になれすぎる嫌なきにしもあらずで、何かの機会には、是非とも『水経注』研究の巨大な水山の水面下の部分を

発表していただきたいと望むのは私一人ではあるまい。

とまれ、著者の文章は丁寧でこまかく気が配られ、門外漢にも大変親しみやすい。専門家以外の研究所の多くの方々も本書を御持ちであろ

## 会田雄次 『日本人の意識構造』

(B6判、二一六頁、講談社)

『アロン収容所』(昭和三七年)に初めて接したときのショックを、わたしはいまも忘れない。「ヨーロッパ人が自分たちの尺度で他国を批判するのは勝手だが、私たちまでその尺度を学んだり、模倣したりする必要はないと思う。」(同書六〇頁)ヨーロッパ史の専門家である著者が、著者自身の戦争体験のナマナシイ告白を通して、そう言い切つてみせたのであった。この書を通して、「われらのうちなるヨーロッパ」が音をたてて瓦解するのを覚えた人は、わたしひとりではなかったはずである。爾来、著者は、日本人自身による日本の発見、執拗に追求し始める。それは、その後の著者の著作(評論)活動に「貫して流れているモチーフなのである。

本書『日本人の意識構造』は、『人文学報』

うからいたずらに藩閥に束ねることなく、気のむく所から読まれれば必ず裨益するところあろうし、また中国学に親近感を持っていたかどうかができるであろう。

(梅原 郁)

に掲載された同名の論文を中心に、一篇を除いて、雑誌『日本』に連載された(昭和四〇)「一年」六篇の論文からなる評論集である。「あとかぎ」には、「私は、今日は、もう戦後の自失を回復して、日本人自身が日本を発見してよいときではないかと思う」と書かれている。日本人(著者)自身による日本の発見というモチーフが、本書でもやはり、全篇に流れているのである。

本書を通読して感じたわたしの全体的な印象を、以下、簡単に述べてみたい。わたしは本書を、比較文化に関する評論集として面白く読んだ。この種の評論は、面白く読ませるものでなければ意味がない。それではいつたい、本書の面白さはどこにあるのだろうか。第一は、著者の比較文化の視角に関する問題である。著者

は、西欧と日本とを対比させることによって、日本独自の文化を発見しようとする。しかし、中根千枝氏のように(『タテ社会の人間関係』)、そこにインドを入れると、様相はかなり変わってしまう。要するに、どこの文化圏を鏡にするかによって、そこにうつし出される日本の姿は異ならざるをえない。にもかかわらず、著者の日本発見がすぐれているとしたら、それは「新鮮な着想や新しい角度からの発想」(九頁)にこそ、求められるべきものであろう。たとえば、第一章の論文「日本人の意識構造」では、突発非常時に親が子を守る姿勢が、日本人とアメリカ人とは正反対であるところから、日本人の精神構造の特質が説明されている。その着想の面白さが、この論文のカギである。第二は、著者の論述方法(説明のための材料をも含めて)に関する問題である。著者はいつも、数多くの日常の見聞や歴史上の逸話などを駆使して、たいへん歯切れのよい文章を展開する。著者の恣意にしたがって、説明のために選ばれる材料はまったく手当りしだいである。その変わり身の早さは、まさに「テレビ時代」に相応しい。著者がジャーナリズムに歓迎され、著者のファンが世に多い所以であらう。

著者には、二つの顔がある。『研究者』としての顔と、『評論家』としての顔が。本書のなかに、前者の顔を見い出そうとすれば、それは

失望に終わること受け合ひである。奇抜なアイデアと、論理の飛躍を百も承知で展開する著者の筆の運びに、快哉を覚えないうような読者を、本書は必要としないからだ。念のために申し添えておくなら、わたしは、『評論家』と『研究者』との違いを、アイデアの奇抜さゆえではなくて、アイデアを定着させようとする姿勢の違いに見い出したいと思う。著者の面白い

## 飛鳥井雅道 『近代文化と社会主義』

(A5判、二八五頁、晶文社)

どうしても書くが書かなければならぬらしい。絶対命令だそうである。意地の悪い委員さんたちだなと恨む。

しかたがないから、型破りの書評でいこうとおもう。いや、型破りにならざるをえないのである。この本は、革命的民主主義者・幸徳秋水と自由主義的インテリゲンチヤ・夏目漱石を、『マルクス主義』とくに……共産主義運動のなかで統一してとらえようとする視点に立つて書かれたものだが、してみると、革命的社會主義者・飛鳥井雅道とブチブル・小インテリのほくとの小対立だつて、マルクス主義運動のなかで統一してとらえられてしまう。つまり、ひと

アイデアは、その定着がはかれぬかぎり、『莊重で難解で引用が多ければ、學術論文と思ひこむ』(二一五頁)のような救いがたい研究者(その末席をけがすわたしも含めて)にたいする、真の批判とはけつしてならないであろう。(井上忠司)

ことでも好意的批評をすれば、『近代文化と社会主義』の構図のなかにおさまってしまうことになる。型破りにならざるをえないゆえんである。

フランス文学のばあい、『近代文学』と『社会主義』は、切つても切り離せない仲だつた。公認されてはいないかもしれないが、誰でも知つている仲、つまり内縁関係だ。ユゴーやジョルジュ・サンドと空想的社會主義、ボードレーとブルードン。いったん愛しあつただけに憎しみも格別だつた。フロベールとバリ・コミュニケーション。この愛と憎しみを無視しては、フランス近代文学は語れない。

ところがこの本を読むと、日本の近代文学論はそうではなかつたらしい。第一に内縁関係があるとも考えられていなかった。飛鳥井説はそれに対する反論だ。第二に愛もなかつたから憎しみもない。飛鳥井説は、愛はあつたという論証だ。憎しみはどうなのか。この本ではそれは論じられていない。愛の永続(「とくに大正中期以降の共産主義運動のなかでの統一」)の可能性を主張したにとどまる。

だがぼくには、憎しみのほうが文学的可能性に満ちているようにおもわれるのだ。漱石の愛、つまり『日本の近代化』に対する『社会内存在としての自己批判』には、すでに社会主義に対する『冷嘲的』批判も、ふくまれていたのである。

だから、蜜月があつたことを論証したとしても——それだけでも日本の近代文化論のなかでは一歩前進なのかもしれないが——それだけでは、日本の近代文化を理解したことにならないのではないか。飛鳥井の驚嘆するほどの実証的能力を、今度は憎しみの実証に向けて欲しいものだとも思う。愛の可能性がそれでついでにしても。以上、ペンミストからの提言である。

(竹内成明)

## 井上 清 『西郷 隆 盛』上・下

(新書判、二一六、二三四頁、中央公論社)

私は由来、伝記が大好きである。対象が大西郷、書き手が井上清とあつては、食指のうごかぬ筈がない。

一読しおわつて、たしかに傑作だと思った。

「個性と階級性と時代との相互作用・関連をとらえる」試みは、大いに成功している。これが私のほいままな評価でないことは、氏の論敵原田清氏の書評(『歴史評論』一九七一年二月)によつても知られよう。しかし同時に、ある奇妙な感じが残つたのも事実である。

門外漢の私には、実証的な面でクレームをつける力はない。ただ一つ、上巻二二八ページに引かれた、沖永良部島での西郷の孟子講義の筆記というものの、あれは恐らく西郷のものではあるまい。べつに調べてみたわけではないから断言はできないが、山崎闇斎派の誰かの講義に相違ない。それからもう一つ、下巻二〇五ページに鹿児島私学校の綱領を引いて「王事のみならず民義と一組にして『王事民義』といえ、必ずしも封建的でないこともある」というのは「西郷および私学校党は近代民族主義者でもあ

つた」と展開してゆくくだりなのであるが、このくだりを読みながら私はかつて雑誌『パンセ』一九六二年一〇月号でよんだZigzag(阮氏の長編「ベトナムにおける儒教とマルキシズム」)を思い出した。阮氏は儒教がデモクラシとサイエンスとを欠いていることを指摘しつつも、儒教にはマンダリンの儒教とビーブルの儒教(コンフュシアニズム・ポピュラー、人民に密着した地方のレットレスなわち読書人の儒教)があつたとして幾々その相違を説明したのち、いう、民族解放のために闘うベトナムのマルクス主義は、代数、化学、共和憲法学などを学んだ新しい知識人(阮氏云、自分も実はその一人であつたのだが)に承譜するものであるよりも、むしろ儒教に承譜するものである。「マルクス主義者と純正な儒教徒(読書人)」との間には、政治目標の共通性以上のものがあつた。それ以上に更に思想の領域で親縁性があり、それが両者の接近をたすけた。そして時として、一方より他方への転進がおこつた云云。」井上さんの論点とびたりとかみあつての理想ではな

いかもしれないが、ともかく阮氏のこの指摘を想起したことを言い添えておきたい。

スベースはもはや尽きてしまつたが、はじめにいった「奇妙な感じ」という点について説明しておきたい。本書によれば西郷のやつたことは、とりわけ維新後に彼のやつたことは、日本の近代国家建設のためには、一貫して倒行逆施という印象であるが、にもかかわらずその心情の純粹さ、偉大さが、これまで一貫して、たたえられる、それが奇妙な感じがしたのである。これは氏の福沢批判にいわゆる「西郷個人の心事をその行動の客観的役割から切り離す」(下巻二二五ページ)ものに他ならないではないか。「ついに人民の立場に立ちえなかつたが故に」(下巻最終ページ)ということでは、到底すまされない。

マルクス主義者の常套論法「お前のいうことは主観的にはなるほど……だ。然し客観的には……の役割を果すものに他ならない」という論法の前段と後段を入れかえただけではないか。西郷が偉大であつたとするならば、それは単に心情においてのみでなく、その経緯においても、本質的な点で偉大であつたのではないか。要するに明治政府が進んだ道を歴史的必然として(この措定の底には、自然発生的に資本主義国となつた場合の諸事象が、いわばノーマルな「歴史法則」として、置かれている)前提する

ことがおかしいのではないか。アジアが西欧の資本主義・帝國主義體制にまきこまれて以後、反封建（これはいわゆるノーマルな場合に當る）反帝のどちらがより本質的課題であるかということは、日本の特殊性ということを以てしては対抗しえないほど、それほど本質的な問題

## 飯沼二郎 『風土と歴史』

（新書判、二一四頁、岩波書店）

なのではなからうか。殊に今日の時点から見れば、猶更そんなのではなからうか。そしてそこからふりかえって見れば、西郷のもつ大きな意味は、もつと親切に理解しうるのではなからうか。

（島田慶次）

本書は、きわめて野心的な労作である。時間的には農業の發生した時点から現代まで、地理的には旧世界の全域を考察の対象とする。著者は、農業技術に焦点をあてながら、壮大な人類史をえがきだそうと、さまざまな問題提起を試みている。その中心テーマには、農業の起源とその伝播、乾燥地帯と湿润地帯の農業技術の歴史、農業技術と社会発展の関係、日本近代化論の四つがある。

讃辭は新聞の書評等ですでおおくのべられている。この書評では、「人文」の性格からして、結果として内輪はめになることを避け、なるべく批判的に問題をいくつつかひろつてみよう。

農業起源とその伝播に関する部分で、著者はヴェルトの文化史学派の伝播論を採用して論をすすめている。ところが、ヴェルト説における問題点がいくつか、そのまま本書にうけつがれている。たとえば、本書ではヴェルト説を採用して、モロコシ、トウジンビエのミレットは、両柄の犁、コブ牛にもなつてアフリカに移入された作物とされるが、おなじ岩波新書の中尾佐助著「栽培植物と農耕の起源」では、逆に、これらのミレットはアフリカ原産の作物でアジアに伝えられたものである、とされている。これは、アフリカを世界の農業起源のセンターのひとつとして認めるかどうか、という大問題につながってくる事柄である。ところで、こ

れらのミレットが多く栽培されるサハラ以南のアフリカは、犁は本来存在せず鋤による農耕の地帯に所属しているのだ。

著者は、マルトンヌの乾燥指数に手をくわえて、旧世界を四つの地域に区分して、おのおのの地帯における農業技術体系を論じている。その地域区分・農業技術体系の分類は著者の独創できわめて高く評価されるべきであるが、別の地域区分法を採用することによって、風土と農業技術体系についてのより高い精度の相関をみいだすことが可能ではないか、と考えられるふしがある。たとえば、吉良竜夫の指数による生態区分を使用すれば、アジア・太平洋・アフリカにおける根栽農業の地帯をもつと明確に位置づけることが可能である。

また、農業の技術体系の歴史と社会の発展段階の関係を著者は強調するが、この二つの事柄にかなりの相関があることはもちろんのこととして受け入れざるを得ない。しかしながら、農業形態と社会発展段階はかならずしも一致するものではないはずである。その関係を著者が強調するあまり、意地の悪い読み方をすれば、社会の発展は技術の伝播にかかっている、という技術決定論としてうけとられる恐れがありそうだ。

「近代主義と民族主義」という副題をもつ終章の日本近代化論には考えさせられる点が多

い。この短い一章には、別に一書をなすべき内

容をじゅうぶんもっているものである。

(石毛直道)

## 吉田光邦 『星の宗教』

自然と人間シリーズ III

(A5判、二五九頁、図版七二、淡交社)

「星という自然が信仰対象となる場合、それは山や海などの自然の場合とくらべると、同じ自然とはいいながらかなりちがった性格をもつようだ」(あとがき)と著者は述べておられる。すなわち、この本は、「星と人間の関わりあい」をたしかめる気持」(あとがき)で、星への信仰がもつ性格を解明するために書かれたといえるであろう。

星は、日や月と同じようにきわめて普遍的な存在であつて、山や海などの自然の場合のように、地域によつて表情や性格を変えることはない。天体の輝きやその相対的な位置は世界のいかなる場所においても変らない。光る点としての星はわずかに色彩の変化を見せるにすぎない。

地上の人間から観察されるこうした星の性格から、具体的な物ではなく、むしろ抽象的な形である「星の群のなかにある法則や秩序を発見するには、抽象と構想の力を必要とする」(あ

とがき)。こうした観点に立つて、著者は、古代文明のなかでの星のとらえかたを、東西の文明の史料から歴史的に把握しようとする。その過程の中から、われわれは「太陽と月にならんで空を飾る星は、……天空のワキ役的な存在であつた……が人びとは多様な星のなかに存在する秩序に気づいたとき、そこに地上の秩序のシンボルとしての星を発見しはじめた」(序章)ことを知る。

オリエントの星(一章)、地中海世界の星(二章)、多様な世界の星(三章)、イスラム世界の星(四章)、キリスト教世界の星(五章)のなかに、さらに古代中国の星(七章)に、その事実を見ることが出来る。同時に、「星と人間の関係の普遍性は、時間的にも、空間的にもひろがりをみせる」(あとがき)ことを認めざるをえないのである。

この本は、折にふれて注意ぶかく収集された豊富な資料を駆使し、しかも図版入りで、著者

の問題意識に解答をあたえる試みの展開といえるもので、読者は人間と星とのかわりを、自らの体験をも想起しながら、その解答の展開を見ることが出来る。

なかでも、占星術と占星術師(六章)、および日本での展開と妙見信仰(八章、九章)は、興味あるものといえよう。前者は、占星術の性格について述べたもので、占星術師は天文学者、数学者としての能力をもっており、正確に天体の位置を観測するとともに、天体の運動の過程を正しく知っている必要があつた、という点で合理的であつた。しかし、天体運動を地上の現象と関係すると考えるところに飛躍があつた。これは信仰的側面をもつ占星術の特質といえる。この側面の克服こそ近代科学への脱皮が約束されたのである。

後者は、中国文明の影響下にあつた日本における、星うらない、星への信仰を、現地調査を踏まえて解明されている箇所である。単なる文献的手法では解決されない限界を調査資料によつて補なっているばかりでなく、この本のもつ最大の強みを示した部分といふことができるであろう。

(橋本敏造)



## 家族問題の研究

(班長・太田武男)

この研究班は、夫婦・親子・相続をめぐる諸問題に関する研究を、その主たる目的ないし内容とするものとして昭和四一年発足し、最近では、親子問題を中心として研究を進めていること、本誌「第一号」に述べた通りであるが、編集委員より求められるままに、「昭和四五年下半期の歩み」を紹介すれば、つぎの如くである。

その第一は、特定研究「産業構造の変革にともなう諸問題」が設定されたので、親子問題の研究を行なうかたわら、当研究班は「産業構造の変革にともなう家族関係の変化」をテーマに右研究の一端を分担し、そのための実態調査を八月に実施し、その報告をまとめたことである。したがって、今回われわれの実施した調査は、産業構造の変革にともなう山村における家族の生活の実態と意識の推移の究明を主たる目的ないし内容とするものであった。だから、調査対象としては、かつて昭和二十七年に「青年の生活」について調査を実施したことのある地域（京都府北桑田郡美山町（旧鶴ヶ村）、今回はその中の

豊郷地区）を選び、その地区の家族の生活が、その後の産業構造の変遷にともなう過疎化現象によって、どのようにに推移したかの問題を、①むらの構造と生活意識、②あとつぎの問題と「家」意識、③主婦と老人の生活、④家族内の人間関係の問題を中心に、質問紙法や直接面接法によって実施した。したがって、その報告、太田・井上編『山村における家族の生活』（京大人文研調査報告二七号として三月末刊行）の内容も、右の四つの問題が中心となつて第二章から第五章が形成されており、それに第一章地域の概況と第六章むすびが附加されて六章建てになっている。

いま一つは、「現代の内縁問題の研究」に関する朝日学術奨励金の設定を機会に、当研究班の仕事の一環として昨年度実施した「婚姻の届出状況」に関する全国調査の集計・整理ができたので、その検討会を度々開催して、その報告書、太田ほか五名共著『婚姻の届出―届出婚主義の現状と内縁問題―』（有斐閣より三月末刊行）をまとめあげたことである。ちなみに、右報告書は、緒説・婚姻の届出とその受理・婚姻届出の現状と問題点・結語―届出婚主義今後の問題―の四章建てとなつており、それにシンポジウム「現代の内縁問題」が附論として加えられている。

なお、夫婦問題の研究を中心とした当研究班第一期の

研究報告、太田編『現代の離婚問題』（有斐閣）が刊行されたのもまた、この期間中のできごとであった。ちなみに、右報告書は、現代離婚問題の社会的背景・離婚の実態・離婚をめぐる法律上の諸問題の三部建てとなっており、班員一三名の論文が収められている。

## 日本文化の研究

（班長・林屋辰三郎）

こんど昭和四十六年四月から、日本文化研究班を組織することになり、所内の討議をも経ていよいよ誕生ということになりました。しかしこの報告を書いている時点は、いわば胎動期であり、従ってこれも「前口上」ということになります。去年五月にわたくし（林屋）が入所しましてから、この研究班を組織することが、一種の義務感をもって重くこころのしかかっていましたので、二月に所内の討議に組織案を提出して大方の賛成を得ました時は、文字通り十カ月の産みの悩みから、ホット解放されたような気分でした。

そう申しても、この研究班にそれほど自信があるわけではありません。そこから産み出される研究がどのよう

になるかは、全く五里霧中というところです。近代文化の母胎をさぐるというのがその目的ですが、主として日本の自生的な近代文化というものが、あるのかないのか、あればどのようなものか、それはどのように評価したらよいかというようなところからはじまりましょう。むしろ意識してそのような研究の方向を考えてみました。なぜなら、近代文化というと、もっぱら欧米に源流を求めようとするのが、これまでの一般的な方向でしたから。

しかし、そのようないちおうは楽しくもある研究ですが、わたくしも外見ほどは若くありませんので、皆さま方の協力を得て、七年間でなにかの、せっかく新設された「日本文化」部門の基礎となるようなしごとをのこしたいと思っています。どうかよろしくご支援をいただきますよう、お願い申し上げます。

テーマは、「日本に於ける市民文化の形成」ときだめました。全期間七年の第一期を二年とし、主として化政文化の研究に当てます。

### 社会科学における

### 電子計算機の利用

(班長・三宅一郎)

コンピュータを用いるシミュレーション(模擬実験)の最も初歩的な問題にランダム・ウォークというのがある。よっぽどのまよい歩きを乱数表を用いてシミュレートするわけだが、何千歩のうちにはときたま一定の方向にかなり進むこともあるものの、原点の周りをぐるぐる廻っているだけのことが多い。わたしたちの研究班の現状はこのランダム・ウォークに似ていて、なかなか問題がしほれないだけでなく、次の一步の予測がつかないことさえある。

強しいていえば、このランダム・ウォークも最初は意識的なものであった。第一年次の目標として班員個人の研究とコンピュータの関係を明らかにすることと並んで、社会科学におけるコンピュータ利用の現段階をできるだけ広く見ておこうと計画したからである。広い領域をカバーしようとする、現在の班員の能力では限界だからなので、いきおい、班員外の専門家の手を煩わすほかはない。昨年一月より現在まで、次のような人

々を招いてその専門とする領域におけるコンピュータの利用について報告していただいた。

杉田繁治(京大工学部)「コンピュータによる翻訳」、生沢雅夫(大阪市大)「心理学における電算機利用」、別府春海(スタンフォード大)「お歳暮調査のコンピュータ処理」、山田具男(日本ソフトウェア)「グラフィックディスプレイによる研究開発のPERT」、犬橋保夫(京大教養部)「コンピュータによる教育の問題」、松浦義行(京大教養部)「因子分析の諸方法」。

この過程で発見したのは、京都はもとより大阪まで考慮に入れても、この方面の専門家がきわめて少ないということである。社会体系のシミュレーションやゲームングを計算機でやった経験のある人は一人とてなく、より歴史の古い内容分析でさえ同様である。人口の比較的多い心理学畑でも、学習理論や小集団論における数学モデルの解説をしてくれる人を探すのに骨が折れる。そこで、来年度は神戸大阪方面はもとより東京からも講師を招聘したいと考えている。また、これまでレベルが違すぎるのではないかとおそれ敬遠してきた経済学、経営学方面にも積極的に入って見たい。

このようにまだまだランダム・ウォークから離脱できそうにはないが、離陸の一つの手だてとして、共同でコンピュータにかけられるデータを生産することを考え

た。丁度、「産業構造の変革に伴なう諸問題」という特定研究が発足したのでこれに参加し、堺市を中心として都市の社会、政治、行政に関する統計データの蒐集に努めることにした。班員の中にはこの特定研究に別の課題で参加しているものが多いので、残念ながら全員がこのデータ作りに加わるわけではないが、第三年次には経済学、政治学、社会学など各方面から分析可能なデータが分析のためのプログラムとともに出来る予定である。

データ作りという点に関連して、共同研究班とは無関係な私の個人的プロジェクトであるけれども、世論調査データの蒐集整理作業についてここでふれることをお許し願いたい。世論調査データの社会科学への貢献についてはいうまでもないが、貴重な原資料が保管されず散逸にまかされているのは残念である。データの蒐集、保管のためにはデータセンターのような公共的施設が望ましいけれども、ここ二、三年のうちに設立される様子も見えないので、僅かな科学研究費（一般C「世論調査素データの蒐集、整理、保管」）をえて個人的なコレクション作りを始めた。あちこち、データの存在するところを歩いてみて、データ保管の不備の現状と蒐集整理作業の大へんなことがよくわかり、開始半年にしてもうグロッキー気味だが、戦後の世論調査データを時系列に並べて、これを中心として現代史を書く試みを楽しい目標と

して、もうしばらく頑張りたい。

あれやこれやで、私の研究室は人の出入りも多くなりデータやカードの山が出来て同室の竹内君の高遠な思索を乱すことしばしばでまことに申しわけなく思っている。紙面を借りて一言お詫びさせていただく。

## 朱子研究

（班長・田中謙二）

この期間における研究会はすべて八回、「朱子語類」の会説討論はようやく軌道にのり、卷三鬼神篇の前半を終了した。その間、山田慶児班員による「朱子の気象学について」（東方学報第四十二冊に発表する予定）の研究報告があった。

卷三に入って軌道にのった感がされるのは、この篇が朱子学の急所に直接ふれる問題を含むからであろう。すなわち、鬼神論は儒教における祭祀の問題と関連し、論考を一步誤まれば、仏教における輪廻説に陥る危険があり、朱子は門弟の鋭い質問に対してつねに慎重を期し、しばしば苦しい答弁をよぎなくされている。それに、この一篇は前期に扱った卷一とは異なり、鬼神に関する考

え方がかなりまとまって提供されており、参照資料の蒐集もほぼ完璧を期したこともあって、思想史の専門家だけでなくも、比較的理解しやすく、したがって、前期にまさる討論の旺盛をみたこともしばしばであった。ただ、今期も研究報告がただ一件にとどまったのは遺憾であるが、われわれが志向する研究報告と会説を組み合わせた理想形態の実現は、特殊な難解さをもつ基本資料を消化するわれわれの場合、少なくとも第三年を俟たねばならぬことをあらためて痛感した。

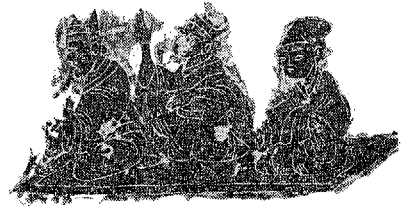
なお、この機会に、われわれが用いている「朱子語類」のテキストについて、付言しておこう。現存テキストでは信頼性の高い文学部所蔵朝鮮刊本を底本とし、中国刊本で最も早い明・成化（一四七三）刊本および天理大学所蔵の朝鮮刊本二種のほか、現在の語類に定着する以前のテキスト、おそらくは海内の孤本と推定される、九州大学所蔵抄本の影片をも参校している。ことに、抄本は通行本の語類に取めぬ資料を少なからず含み、かつ同一資料にもあきらかに原形を伝えたためるような異同が発見され、われわれはテキスト面でも十分にめぐまれた状況にあることを報告しておく。

## 漢代文物の研究

（班長・林 巳奈夫）

漢代の生活を知る資料として、文字で書かれた文献はいくらもあるが、これはいさか抽象的なきらいがある。考古学の遺物は具体的ではあるが、腐らないものだけが残った、いわば骸骨のようなものである。漢代文物の共同研究を始めるに当り、もっと現実的なものを、ということとまず絵画的資料をとりあげることにした。墳墓の石造の墓室の内壁や、墓の前に建てられた石造のほこらの内側などには、浅い浮彫、刻線でもって、公私の生活や神話的な題材がえがかれている。画像石と呼ばれるものである。

ところで漢代の画像石というとすぐ誰でもが思い起すのは、山東省嘉祥県の武梁という人のものである。墓前に建てられた二坪足らずの石のほこらの、板石づくりの奥壁と左右の壁に刻まれたもので、伝説的な古代の聖天子の図像とか、貞節な女、孝行な子供、敵討ちなどの有名な物語の数々を、一つの物語につき一シーンの形で刻んだものである。画の傍に登場人物の名前や、物語の要



約が一緒に刻まれているため、宋代に発見されていろいろ、古典との関連の面でも多くの中国人研究者の関心をひいている。近くは当研究所の研究報告「漢代画像の研究」の第二部にも大きくとり上げられているが、いかにも儒教的な道德教育の臭気の強いものである。

しかしこのような画像石は例外的で、大部分はそういう道德教育的なテーマとは縁がない。われわれが昨年四月から資料として選んだ山東省の沂南の画像石にしても、十一月から検討を進めている江蘇省徐州近辺のものにしても、えがれているのは晴れの儀式とか訪問、宴会、歌舞、曲芸などの芸能、労働、戦争、それに超自然界のテーマ——神々や神話的動物、神仙など——一口にいえば当時の人々の生きた世界のすべてが主となっていて、漢代の文物を研究する上に恰好の材料となるものである。宴会の場面に描かれた酒壺の画に、考古学者は特定の時期に特徴的な型式の青銅壺をアイデンティファイすることができ、描かれた品物に限らず、漢時代というものが画像石に正直に活々と描き出されていることは疑いもない。

われわれはこの一年間、画像石の資料に親しみ、検討を重ねることによって、漢代の文物について知識を豊富にしたことは勿論であるが、この強く直観に訴える資料によって、漢時代の上下各層の人々の生活にとけこむことができるようになったと感じている。

## 敦煌写本の研究

(班長・藤枝 晃)

昨年八月末から十二月末まで藤枝と古泉とはヨーロッパに出張した。その不在中も研究例会はつづけられて、そこでは主として吐蕃期写本が取上げられた。最近ずっと北朝期写本に集中していて異種の資料からしばらく遠のいていたために、其方に関心をもつ班員諸君の意向によったものである。十二月までそれをつづけて、班長不在中の方がふだんより出席者が多かったという結果が示された。これは研究班の成長を示すもので、まことに慶賀すべきことである。右の成功の一因は、例会を毎週でなく隔週に開いたことにある。だから今後もうつと隔週に集まることにしたいとの声が班員の間から起こっている。われわれの研究班は、所内の班員が極めて少なく、

大部分は所外からの参加者であり、毎週の会合となると、それらの人たちの負担も大きい。だから、この声にも十分の理由はある。けれども、あと四年ばかりの間に北朝写本の総ざらえしようという目標から見ると、今すぐにはビッチを落としかねる。これは、もう少し目鼻がついてからのことにしたい。もう一つ、研究対象を二本立てにして、異なった主題を隔週ごとに扱かうという方法も考えられる。以前にいちど試みたことがあるが、これは一つの班を二つに割ることになり、またそうなる、ちがった専門の者が共通の関心をもち合うとの共同研究の妙味も薄れて、成功とは言えなかった。

次はヨーロッパ組の動き。藤枝はコペンハーゲン大学への出講が主要目的であり、古泉は、一九六八年に井ノ口班員が着手した東ベルリン、ドイツ・アカデミーのトゥルファン漢文写本の目録作りを継続した。井ノ口の仕事は『目録』第一巻として近く刊行せられることになっており、古泉の担当分は第二巻となる。十月から十一月にかけて三週間ばかり、藤枝・古泉は同行してパリとロンドンとの敦煌写本を調査した。もっぱら北朝期のものに重点をおいたが、六世紀の半ばすぎに、北朝系の用紙に南朝系の用紙がとって代る経過を、かなり判然とつかむことができた。それには、ベルリンの資料が大いに役立った。この確認は一つの収穫であった。収穫という意

味は、これが用紙だけの問題でなく、書風にも同様の推移があらわれており、更にはまた学問そのものまでが、ほぼ似たような傾向を示すことを、かねて写真の上での研究で認めていたからである。

また、この旅行のときに、ケンブリッジ大学図書館所蔵の北京図書館敦煌写本マイクロフィルムをそっくり複製してもらうように交渉が成立した。その作業にとりかかったとの知らせも来たが、思いもかけぬ英国の郵便ストライキのために、現物の到着はすこし遅れそうである。パリで注文した約六〇点の写本のマイクロフィルムは、やがて到着することになっている。

## 科学者列伝の研究

(班長・山田慶児)

中国の歴代王朝の正史である二十四史には、方術列伝あるいは方技列伝・芸術列伝などと呼ばれる巻がある。そこに収められている人物には、天文学者・数学者・本草家・医者などのほかに、さまざまな分野の技術者や画家・錬金術師・占師などがある。中国人はこうした科学・技術・芸術の分野を方術(方技・芸術)という概念の

もとにとらえていたのである。方術家のなかでも、とくに有名な人物については、べつに独立の伝がたてられている。方術家の伝記をよむと、中国の科学技術について、いろいろなことがわかってくる。どんな分野が官僚制のなかにくみこまれ、どんな分野が在野の人の手にあったか。官僚制のなかで、あるいは、社会的に、どんな位置づけがあたえられていたか、各分野の相互のあいだに、どんな連関があったか。科学技術の担い手はどういう人たちであったか、そうした点がたいへんはつきりする。時代を追ってゆくことによって、各分野の比重や位置づけの変化もわかってくる。それとともに、いろんな問題もでてくる。

たとえば、天文学は国家の手で維持される公的な科学だったが、官僚制のなかでの天文学者の位置づけは、時代とともにさがってゆく。しかし、天文台の機構や観測装置などは、むしろ整備され、規模も大きくなってゆく。それはなにを意味しているのだろうか。あるいは、天文学者のなかには水利事業にたずさわったひとが多い。一見、迂遠にみえる天文学と土木工学には密接なつながりのあったことがわかる。とすれば、天文学の観測技術と土木工学の測量技術とのあいだに、あるいは、両者の計算技術のあいだに、具体的にはどんなつながりがあったのだろうか。

この研究には、正史にみえる方術家の伝記をとおし、中国における科学技術の制度的・社会的な存在形態を明らかにするとともに、かれらの代表的な文章や著作にも眼をくばることによって、各分野のあいだの内的な連関もさぐってゆきたいと考えている。

研究会は十月に入ってから出発した。最初にとりあげたのは、後漢書方術列伝であり、現在およそ三分の二あたりまで読みすすんだ。班員は所内外をあわせて十一名、毎週火曜日の午前中に会談をおこなっている。

## 異端運動の研究

(班長・会田雄次)

これまでヨーロッパの中世末期の異端運動について述べられる場合、さまざまな異端運動が列挙され、せいぜいそれらの間の影響、被影響の關係が論じられるだけだ、異端運動にパターンの違ひのあることは考えられてこなかった。それはわが国だけのことでなく、ヨーロッパでもそうであったといえよう。しかしそれらは二つのパターンないし類型に大別できるのではないだろうか。もとより異端運動の実態はさまざまであり、その影



響関係は複雑である。しかしそのようなパターンないし類型を考えることは、それらを整理していく上で有効ではないかと考えられる。

では、そのパターンないし類型とは何か。一つは原始キリスト教会のあり方に帰ろうとするもの(Primitivism)であり、他は「千年王国説」である。言葉をかえれば、前者は「使徒的生活」vita apostolicaを理想とする宗教運動、後者は世直し期待・願望の宗教運動と表現することもできよう。前者の代表は初期ワルド派、フランチェスコ派の厳格派に、後者の代表はフス派のタボル派に求めることができる。一は社会変革的要素をふくまない純宗教的運動であるのに対して、他は近い将来に背神の徒は打倒され、選ばれた者のみからなる至福の千年王国が実現されることを説き、期待・願望の内実はいちじしく社会的である。

もちろん十四・五世紀になると、異端運動はしばしばこの両要素を交えている。後期ワルド派はもはや「使徒的生活」を理想とするだけでなく、千年王国説的要素を交えることが多く、フランチェスコ派の厳格派の流れをくむベギン派もそうである。逆にタボル派にも「使徒的生活」を理想とする要素が皆無なのではない。けれどもこのような実態は二つのパターン、類型を考えることが無理であることを示すものではなく、その二つがある程

度の親和性をもつことを示すのではないだろうか。

右の構想はまだ十分に熟したものではない。ここでは二つのパターン、類型と表現したが、その二つが歴史的な流れとしても把握することができるかどうか、という問題も残されていよう。また班員の間に異論もあるのが現状である。われわれの研究班は西ヨーロッパだけでなく、ビザンツ圏、日本、中国の異端運動の研究も包括しているので、これはわれわれの共同研究の動きの中の一部の、そして全く中間的な報告にすぎない。

### 理論人類学の研究

(班長・梅棹忠夫)

まえにやっていた「重層社会」研究班のころから、班員のあいだで「理論人類学」というような分野をやってみたいという声があつたので、「重層社会」研究班のいわば直系にあたる「比較文明論」研究班のほかに、「理論人類学」研究班という、一種の出店をつくつたのである。

もっとも、理論人類学などという既成の学問があるわけではない。これからつくってゆこうというのである。

ウィーン学派の文化圏説とかマリノフスキーの機能学説とかをはじめとして、人類学においても「理論」と称せられるものは、古来すくなくないけれども、そういう諸「理論」の学説史的勉強をやるうという気もちは、われわれにはさらさらない。むしろ逆に、徹底した現在の学理的観察のなかから、文化と社会についてのあたらしい「理論」の抽出をこころみようというのが、この研究班の基本的態度なのである。

われわれは、「理論」ということばを「モデル」のことと解している。文化と社会のモデルがつくりたいのである。それも、できうべくんば、数学的モデルがつくりたいのである。文化の数学的モデルの形成については、まえにかいたが（梅棹、「文化分析の構想」人文学報第二二号）、それ以後も同種の関心は持続展開し、研究班参加者諸氏によって、さまざまなかところみがうみだされている。その第一は、言語分析的アプローチである。アメリカでさかんなコンポーネンシャル・アナリシスなどは、この方向に属するものであろうが、わが研究班ではさらに「比較文明論」研究班と交錯しつつ、エスノ・サイエンスへの傾斜がつよい。

第二は、精神人類学的アプローチである。心理学あるいは精神病理学からはなれて、人間精神の作動様式を定式化しようという方向である。班員藤岡喜愛氏がこの方

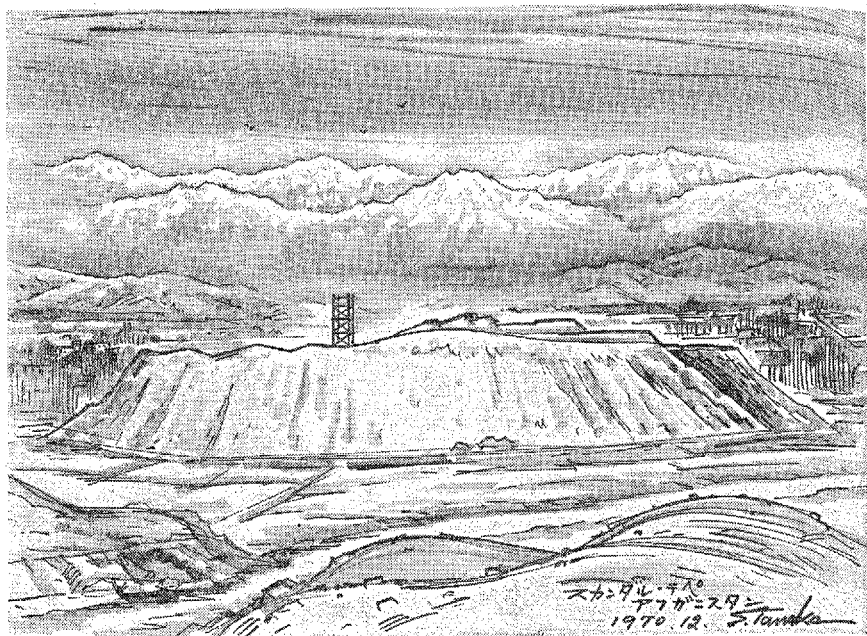
向を代表する。

第三は、考現学的アプローチである。街頭あるいは住居内において生起しているさまざまな事象の徹底的観察・測定を通じて、その現象のシステムの構造を抽出しようとする。班員石毛直道氏らがこの方向を代表する。

第四は、数理社会学的アプローチである。アフリカなどでの観測側から、部族と人口との数学的関係を抽出しようとするもので、班員和崎洋一氏のP・N理論、部族混合および系列性の研究などがその代表である。

第五は、親族数学的アプローチである。最近来日せられて、わが研究班に参加された中央研究院民族研究所の劉斌雄博士がその代表である。群論等の抽象代数学によって、親族組織の構造をモデル化しようとするものである。すでに大きい成功をおさめて世界的に評価されている。わが研究班としても、劉氏にまなぶところ大である。班員以外では、山下正男助教教授などの論理学者との交流を期待していたのであるが、山下氏の渡米で、ゆきちがいになったのはざんねんであった。

このように、理論人類学研究班では、いろいろのこころみが展開しているのであるが、はたしてこれで、まとまった「理論」の構築に成功するかどうか、それはまったくわからない。現在はまだ、この研究班の、暗中模索の時代というべきか。



## 旅だより

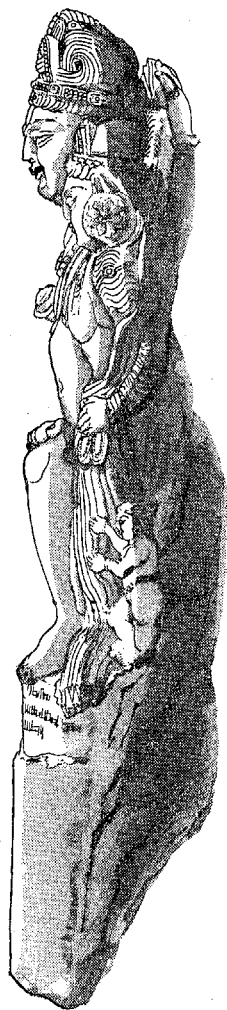
### アフガニスタンから

田 中 重 雄

今度発掘を始めた、スカンダル・テベはアフガニスタンの首都カーブルの北三十キロ、東西四百、南北三百メートル、高さ四十メートル、中央部に隆起を持った一見男性的感じを持った丘です（上図）。

最初見た時、掘り上げるのに十年はかかるのではないかと、恐れをなしたのですが、表土から浅いところに遺構の壁が現われ出し、九月から四ヶ月間、一日平均七十人の村びと達の手を借りて、四メートル角、百十五の区劃を掘り揚げました。私はテベとその周辺の測量に専念したわけですが、その間一部の隊員によってバーミヤン五十三メートル大仏の写真測量も行なわれました。

上層からはベルシャの陶片、中国の染付片等、中層からは、十月も末頃になってヒンズー教のシバ神とパールバティの並身像が出土しました。アフガニスタン産の白大理石に刻まれたこの像は、高さ八十四センチ、台座にはブラフミイ文字の銘文も刻まれ、作は緻密にして力強く、この国としては他に一例あるのみで、非常に珍らしいものでした(右図)。それまでクシャーン期の城塞か仏教寺院趾と考えていた隊員は驚き戸惑ったわけです。テペの最高部から神殿と思われる遺構も現われ、ある時期―七世紀頃―この丘はヒンズー教徒によって占められていた事は確かで、外壁の内側からより古い壁が現われる可能性もあり、もっと掘り進めなければ全貌は掴めませんが、それはそれとして、目前にこの像を突き付けられる事に依って、手薄の感のあったヒンズー研究を押し進めるきっかけにするのも



意義あることだと話し合った次第です。

宿舎へは東大隊の人達、外国では西独、フランス、イタリ、アメリカ隊の人達が訪ねてくれました。

十一月には入るとテペから見える山々は真白くなり、十二月二十日宿舎を引き揚げ、出国手続きの為カーブルへ出ました、

○文学部樋口隆康氏を隊長とするこの調査隊は、五十九年に発足したイラン、アフガニスタン、パキスタン學術調査隊を継承するものですが構想を新にして中央アジア學術調査隊と改称されました。従来京大隊の発掘裝備品倉庫は、パキスタン、ペシャワールの北シャバズガリ村にあったのですが、今度それを引き揚げアフガニスタンへ集積しました。

## ヨーロッパから

藤 枝 晃

### 一

レニングラード、一九七〇年八月二七日  
河野先生机下

いろいろお世話になり有難うございました。八月二日は台風のため大阪―東京便の欠航で足どめ、二二日もその影響で、東京―モスクワ便の出発が三時間も遅れました。但し到着以後は万事順調です。

二四日、二五日の二度、モスクワの東洋学研究所を訪ね、二五日に所長に会いました。百五十年記念式は多分十一月九日にやることになるということです。「コペンハーゲンなら、さう遠くないからその時また来なさい」とのことです。遠くはないと言っても、往復十万と少しかかるので返事に困りました。とにかく、祝辞を所長に渡して来ました。流動研究員の件は、所長、国際交流部長（Veselov 経済学者）ともに機嫌よく話にのってくれました。こんなことで、モスクワに三日

滞在したことは無駄ではなかった様です。着いたのが恰度歴史学会の閉会式の日で、ホテルは満員でした。日本からの参加者は殆んど同じウクライナ・ホテルに泊ってた様でした。学会の参加者四千もあつたさうです。

当レニングラードでは、旧知三人（研究所一人、エルミタージュ二人）わざわざ空港まで迎へに来てくれました。毎日、午前はエルミタージュ、午後はその隣の東洋学研究所へ通つてます。敦煌研究グループは前回（六四年）には十三人いたのが、今は二人になつてゐるので一寸面喰ひました。但し、前回にも中心になつてやつていたのはその二人だけで、実質はあまり變つてゐません。エルミタージュ、東洋学研究所ともに、今は敦煌より西夏に重心が移つてゐる様です。来る土曜午後にストックホルムに参ります。

### 二

コペンハーゲン、一九七〇年九月二九日

「敦煌写本」研究班各位

景気よく、集会を御継続のことと存じます。コペンハーゲンに到着してやがて半月、講義は四回やつて、どうやら軌道に乗つて来ました。当初は、ほとんど質問する者がないので、「どうしてそんなに黙つてる」

と聞いたたら、高校から来たばかりの一、二年生など、外国人の先生の英語の講義がはじめてといふ者があって、「英語で質問などするのが憶劫である」などと言っていました。その内に、一人むやみに英語の上手な奴が居るのを発見して、そいつを相手にしてやりとりしたり、休み時間に駄弁つてゐたら、何と、そいつはアメリカ人でした。とにかく、そいつがリーダーになって、昨日は、途中で一遍休みがほしいとか、漢文のプリントを作つて読んでほしいとか、注文をつける様になりました。この学生は感心に午後時間も居眠りしません。

別封で、研究室の写真を送ります。前の広場は、市内の名所の一つで、茶店が出てます。先週は、ここで軍楽隊の演奏があつたり、映画の撮影に来たり、部屋にじつとしてても、退屈しません。四階が East Asian Inst. 三階が Central Asian Inst. その他、アッシリア学、イラン学、等々、一つの建物に同居してます。但し、一階と地階は店舗です。大学が過密化して近所の家を買収して、二階以上を研究室に使つてます。小生の個室はところが一階で、広場に面した窓三つを占め、控の間が後側についてます。控の間は台所兼暗室、冷蔵庫までついてます。タイプライターは電動式をくれました。I.B.M. の新式は敏感すぎて使い難いので

コロナの旧式電動に代へてもらひました。

デンマーク人とスエーデン人とは、それぞれ自国語で話して、通じ合つてるので驚いてます。青森と鹿児島より近い様です。一昨日の日曜に、水中翼船で向ひ側のスエーデンの Malmo に渡り、Lund という古い町まで見物に行つて来ました。覚えてたのデンマーク語で道をきいたり、買物しようと試みたのですが、流石に僕のデンマーク語はスエーデン人には通じませんでした。

宿は一九世紀初めの建物で、塔がついてます。王宮に近く、近所の商店は軒なみに「王室御用達」の看板を出し、いはば市内の最も優雅なる一画です。朝食のほか、夕食も宿で食べてます。六時半にドラの合図で食堂に集まり、デザートのは別室でコーヒーといふ古風なしくみです。客はデンマーク人のほか、トルコ人、イタリア人、アメリカ人など様々で、食後二十分ばかり雑談して部屋に引取ります。外から食事だけに来る客もあります。

ベルリンの十日間に、写本の時代判定は紙質を見るのが最も確実であることを確認しました。ここでは写本断片が一枚一枚ガラスに挟んでありますから、すかしてみると大変はつきりします。南朝の奥書のある、極めて上質の紙を一つ見かけました。これはこれで、

一つの基準になります。透視撮影にも成功しました。明後日は、王女の御夫君の出席するパーティー出かけることになって、今日はいろいろ心得を聞かされました。

### 三

ロンドン、一九七〇年十一月二日

「敦煌写本」研究班各位

皆様御元氣のことと存じます。去る十月二五日(日)パリよりロンドンに来ました。ロンドンでも専ら北朝期写本に主力をおいています。日付のあるものを根こそぎ出してもらって、書庫の中で撮影します。とても全部はとり切れませんから、各巻から数コマずつ、特に若干点だけ一卷全部をとつてます。ペローズを持って来なかつたのは失敗でした。それがあれば併せて紙質写真もとれたのですが……。せっかく宝の山に入りながら、何とももったいない話です。

去る三〇(金)―三一日(土)、ケンブリッジまで泊りがけて行って来ました。古泉君のほか西田竜雄氏も同行。北京本マイクロフィルムの複写の交渉もどうやらうまく行きました。ケンブリッジ旅行は、専らこんど京都に来るミス・ハーバートの世話になりました。来週はコペンハーゲンから便りを差上げます。

### 四

コペンハーゲン、一九七〇年十二月一日

「敦煌写本」研究班各位

十一月二十九日の日曜から当地はすっかりクリスマスづいて来ました。研究室前の広場、その外あちこちの広場、小公園に市がクリスマス・トリを立てたには驚きました。夜は火がつけます。銀行まで物凄く大きな飾付けをしています。宿の食堂では中央の卓にローソクを四本たてた飾付けが置かれ、その一本にだけ火がつけます。日曜ごとに一本ずつ火をつけるのださうです。*peppercorn* というクリスマス期の飲物が現はれました。干葡萄、丁字、生姜などを蜂蜜で煮て、赤葡萄酒に和えたものです。

十一月二十六日の大学の記念式に羽織袴で列席しました。昨年は学生がデモをかけた由ですが、今年は極めて平穏で、一寸したみものでした。三十人ばかりの新博士に国王が一人一人握手し、優等生には総長が金メダルを手渡します。

二度ばかり寒い日があっただけで、七度―十度ばかりの気温がつづいています。隣室のノルウェー青年は「デンマークに冬はない。長い長い秋があるのだ」と言っていました。正にそんな感じです。但し、日あし

はすこぶる短かく、夜明けは八時で、午後四時前にはすっかり暗くなります。小生目下、夜明けと共に毎日起床してゐます。

本日、帰りの飛行機、ホテルの予約を済ませました。二一日当地発、ケルン・ベルリン経由、二二日フランクフルト発、二三日デリー、二六日バンコック乗替で、二七日(日) 夜に伊丹に帰着します。

Sommerstrom 氏が近くネパールから帰る筈なので、来週か来々週にストックホルムに行つて会つて来たいと思つてゐます。その外に、国内のオールフスという町も覗きたいのですが、どうも時間が足りさうにありません。東海大学のヨーロッパ・センターなるものが郊外にできてゐます。今週土曜に訪問する約束になつてます。

## 外国人研修員・国費外国人留学生 昭和四五年在籍

登録順、記載順序 1 名前、2 国籍、3 出身、4 研究題目

Richard W. Guisso (加) オクスフォード大学、唐代の歴史

Jean Jacques Subrenat (仏) 極東学院 日本における中国研究

Jean Billelet (スイス) スイス国科学研究基金、李卓吾の研究

蘇 仁進 (中) 中国近世の白話文学

Anna Seidel (西独) フランス極東学院、中国仏教と道教の研究

Michel T. Dalby (米) ハーバード大学 唐代科学

Barbara H. Goetz (西独) ヴュルツブルグ大学 文字の研究

Jochen E. Kandel (西独) 公孫龍子の研究

Falconeri G. Ralph (米) オレゴン大学、一九二〇年代政治

社会史

林 文月 (中) 台湾大学、唐代中日文学比較研究

Robert Ravyn (米) カリフォルニア大学 米騒動の研究

Harumi Befu (米) スタンフォード大学 社会交換の人類学的研究

遼 耀東 (中) 台湾大学、『三国志』裴松之注の研究

姜 在彦 (韓) 社会運動の研究

Lilijana Glumac (ユーゴ) 日本文化の人類学的研究

Susanne Jörn (丁) コペンハーゲン大学 唐史及び唐詩の研究

John Major (米) ハーバード大学 漢時代の歴史学と地理学

Donald Roden (米) ウィスコンシン大学 大正中期から昭和初期学生の意識

楊 光国 (中) トロント大学 馮夢龍



# 書いたもの一覽

一九七〇年七月—十二月

(五十音順)



・会 田 雄 次

日本人の意識構造

講談社 一一月

貴族と女性 (歴史の京都 四巻、総説)

淡交社 一一月

実業人の国際観・総説

ダイヤモンド社 一一月

日本人と欧米人

自己啓発 三〇号特集 一一月

・飛鳥井 雅 道

プロレタリア運動の時期区分 (上)

文学 一〇月号

近代文化と社会主義

晶文社 一〇月

・荒 井 健

礼記八曲礼・檀弓V(訳) (世界文学全集 三巻) 筑摩書房 九月

・飯 沼 二 郎

キリスト者と市民運動

未来社 七月

優雅な人びと・怒れる人びと

朝鮮人 四・五合併号 七月

良心的兵役拒否とアメリカ帝國主義

ベトナム通信 三〇号 七月

生きている古代の律令制

毎日新聞 八月一日

もう一度、ベ平連原理の確認を!

ベトナム通信 三一号 八月

市民運動の原点

興文 九月号

圧制を圧制として意識せよ

ベトナム通信 三二・三三合併号 一〇月

世界宗教者平和會議を傍聴して

朝日新聞 一〇月二七日

死ぬまでつづけよう

ベトナム通信 三四号 一一月

京都ベ平連の解体

ベトナム通信 三五号 一二月

・石 毛 直 道

台所文化の比較研究

季刊人類学 一卷三号 七月

カイミロア・解説 (現代の冒険 三巻)

文芸春秋社 七月

エサから楽しみへ

家庭科教育 一一月号

・井上 清

西郷隆盛（上・下）

革命家の魂をぬいたレーニン劇

中公新書 七、八月  
毛沢東思想研究 一二月号

・井上 忠司

戦後における離婚観の変遷

都市の中間階層を中心に

（太田武男編 現代の離婚問題）

有斐閣 八月

・上山 春平

西田幾多郎

ルソーとマルクス

中央公論社 七月

革命のロジック（桑原武夫編）

ルソー論集）岩波書店 八月

中央公論増刊号 一二月

・梅棹 忠夫

七〇年代の観光京都のビジョン

（観光事業経営者夏季講座講義録）

京都市文化観光局 七月

竹村健一対談・未来先取りゼミ（一）

これからは「なまけ者」にならなアカン

週刊ポスト 七月一〇日

未来社会と生きがい（二）

週刊・朝日ゼミナール 一一号 七月

日本人の心で感じたこと

朝日新聞 七月一八日

未来社会と生きがい（三） 週刊・朝日ゼミナール 一二号 七月

私の外国語（共編）

中公新書 七月

生活と文化のなかの外国語（モンゴル語など）

（中公新書 私の外国語）

中央公論社 七月

作品解説・ヤワイヤ号の冒険（現代の冒険 三巻）

文芸春秋社 七月

石毛直道「台所文化の比較研究」へのコメント

季刊人類学 一卷三号 七月

桑原治雄「伝染病の生態」へのコメント

季刊人類学 一卷三号 七月

東南アジアの文化（監修）

Energy 七巻三号 七月

ボーカル・コミュニケーションの文明史（座談会）

ラジオ・コマーシャル 三〇号 八月

言語的帝国主義とエスペラント——世界会議に出席して——

朝日新聞 八月二二日

作品解説・カチン族の首かご（現代の冒険 六巻）

文芸春秋社 八月

私と中央公論 中央公論一〇〇〇号

中央公論社 八月

家事整理学のすべて（共著）

中央公論社 九月

国家形成と海

人文 一号 一〇月

アジアの理念（対談）（状況的——竹内好対談集）

合同出版 一〇月

三川目四「縦横人類学」へのコメント

季刊人類学 一卷四号 一〇月

ポスト万博——大阪の新しい展開（対談・左藤義詮）

ハンジング 一二月号

科学と文化（対談・湯川秀樹）

放送朝日 一二月号

Lingva imperismo kaj Esperanto

La Nova Tajdo n-ro 79 一二月

泉靖一さんをいたむ

共同通信 一二月一六日

牧畜民の食生活を中心とした比較人類学的研究（共著）

（三島海雲記念財団第七回事業報告） 一二月

・太田 武男

現代の離婚問題（編）

有斐閣 八月

現代の内縁問題／シンポジウム／ジュリスト四六七号 一二月

・小野 和子

花ひらく庶民文化（世界と日本の歴史 一六世紀）

七月

・樺山 紘一

中期トミストと後期中世政治思想 史学雑誌 七九編九号 一〇月

中世後期の政治思想（岩波講座 世界歴史 一一卷）

岩波書店 一〇月

・川勝 義雄

貴族社会の成立（岩波講座 世界歴史 五卷）

岩波書店 九月

美への執念

歷程 一二月号

・河野 健二

ルソーとフランス革命（桑原武夫編 ルソー論集）

岩波書店 八月

二十五年目の日本

朝日新聞 八月六日

人為の限界と可能性

潮 秋季特別号 一〇月

アジアと社会科学

アジア 一〇月号

書評・奇妙な敗北

日本読書新聞 一二月

監訳・シャフバハカ 若きマルクスと現代

合同出版社 一二月

書評・近代日本経済思想史Ⅰ 経済学史学会年報

八月 一二月

人権を守る力（座談会）

朝日新聞 一二月一〇日

・阪上 孝

ルソーとブルードン（桑原武夫編 ルソー論集） 岩波書店 八月

・島田 虔次

中国における近代思惟の挫折 再刊 あとがき 一二月

・多田 道太郎

『孤独な散歩者の夢想』について（桑原武夫編 ルソー論集）

岩波書店 八月

遊びの本質と役割

エコノミスト 九月号

・竹内成明

清水幾太郎・戦後行動的知識人の終焉 朝日ジャーナル 八月  
言語意識の陥穽 展望 九月号

ルソーの学問批判 (桑原武夫編 ルソー論集) 岩波書店 九月

・田中謙二

中国古典文学大系・戯曲集(上) (編訳) 平凡社 十一月

・礪波 護

唐中期の政治と社会 (岩波講座 世界歴史 五卷) 九月

・永田英正

春秋左氏伝 (共訳) (世界古典文学全集 一三卷) 筑摩書房 十一月

・中村 賢二郎

王権の拾頭 (日本と世界の歴史 一二卷) 学習研究社 七月  
三十年戦争 (日本と世界の歴史 一四卷) 学習研究社 一〇月  
ドイツ身分制議會 (岩波講座 世界歴史 一一卷) 岩波書店 一〇月

十四・十五世紀のヨーロッパ諸国、ドイツ (岩波講座 世界歴史 一一卷) 岩波書店 一〇月

・狭間直樹

書評・菅沼正久著 中国の社会主義 日本読書新聞 九月二日

・林 屋 辰三郎

芭蕉の文化史的背景 (芭蕉の本 一卷) 角川書店 八月

「平安の新京」序説他 (京都の歴史 一卷) 京都市 一〇月

煎茶と名水 芸能史研究 三十一号 一〇月

島原・天草の乱について 小栗田海教授 退官記念 国史論集 一一月

「いけばな」の流れ (いけばなの文化史 二卷) 角川書店 一一月

・樋口 謹一

ルソーのパトリオチズム (桑原武夫編 ルソー論集) 岩波書店 八月

・日比野 丈夫

陳嘉庚—東南ア商業完全制圧を果した大華僑 流動 二卷七号 七月

内藤先生と金石拓本 (内藤湖南全集 一卷 月報) 筑摩書房 九月

清帝国の秋 (日本と世界の歴史 一六卷) 学習研究社 一一月

年未年始の北京 東書高校通信国語 九二号 一一月

・平岡 武夫

「五経索引」を世界の人に 五経索引内容見本 一一月

・福 永 光 司

五経・論語（共編）

筑摩書房 九月

易（解説・訳注）

筑摩書房 九月

益軒の『養生訓』と梅園の『養生訓』

（日本思想大系 三四卷 月報）

岩波書店 十一月

・藤 枝 晃

平庵穿帯印百選（編並びに序）

京都同風印社 八月

矢野仁一先生と「昭和六年」

東洋史研究 二八巻六号

・藤 岡 喜 愛

テストのできるまで

教育と医学 七月号

小泉英雄「アンチ・ホモ・ファアベル」へのコメント

季刊人類学 一卷三号 七月

吉田集而「イセエビとはしかー民族薬学へのアプローチ」

季刊人類学 一卷四号 一〇月

・船 越 昭 生

地域研究と地誌

地理 一六巻一号 一二月

・三 宅 一 郎

統計汎用プログラム（BMD）の書き換えについて

京都大学大型計算機センター広報 三巻一一号 一二月

・山 下 正 男

行動科学の思想（再録）

現代のエスプリ 四四号 七月

・山 田 慶 児

パターン・認識・制作——中国科学の思想的風土

（広重微編 科学史のすすめ） 筑摩書房 一〇月

・吉 田 光 邦

山・鉾のデザイン流れ（祇園祭工芸品集 五巻）

八月

御所車と花車（日本の文様 二巻）

八月

幕らしの原理

京都市経済局 九月

巨大工場化への反逆

日本及日本人 九月

星の宗教

淡交社 一〇月

日本万国博のデザイン

工芸ニュース 三号 一二月

茶と幕末の日本

茶道雑誌 一二月

工芸社会への反逆は可能か

流動 一二月

巨大社会と人間

心情公論 一二月

定量化ということ

考古学と自然科学 三号 一二月

日本のなかのウメ（日本の文様 三巻）

一二月

内と外にあるもの

家庭科教育 一二月

伝統産業を考える（座談）

京都市経済局 一二月

一九七〇年代の課題

中央公論 一二月

李朝芸術の再発見

日本のなかの朝鮮文化 八号 一二日

技術文明ろん

近代経営 七一二月

## 編集後記

本誌『人文』が、いわゆる「官報」でも学術雑誌でもないことを、改めて確認しておきたい。これは、人文科学研究所の全メンバーが、専門外のものにもわかるように、お互いの仕事を知らせあい、批判しあう場なのである。執筆者は、つねに、このことを忘れないでほしい。とくに「共同研究のうごき」や「講演」の執筆者は本誌を官報と、また「書評」の執筆者は本誌を学術雑誌と、錯覚するおそれがあるようである。このような主旨は、第一号では、必ずしも明確でなかったが、第二号では、はるかに徹底してきたように思われる。執筆者諸氏のご努力に感謝したい。また、本号のカットは、すべて田中重雄氏をわずらわした。併せて感謝の意を表したい。

◇  
二号は一号に比べて大分厚くなった。一号位の大きさが最初からのメドだったので、今回は予定紙数を大幅に上廻ったことになる。その理由は、書評が一号の二点に対して八点と四倍増したことで、講演がこの号に集中したことによる。書評が八点にも上ったのは、この半年間の研究成果が豊富だったことを意味するので、慶賀すべきことも知れない。講演が集中したのは、公開講演が八月と十一月に行なわれるという研究所の行事慣行の結果で、いわば季節的要

因によるものである。しかし、これだけ大きなものが出るのならば、発行回数を増やすことも可能はず、という意見も当然でてこよう。事実最初は年四回発行が望ましいとして再出発行ではないかとされながら、第一年度は二回になってしまったのだった。確かに編集の労は負担である。私などはベテランにまじつてのオプザーパー的存在だったので、口幅つたいことはいえないが、他のお二人の労は大きく、かつその熱心さは、実際のところ少々傍迷惑な位だった。だから唯一人編集委員を交替していくオブザーバー的存在としてはいいよいいづらいことなのだが、次年度からは何とか年三回は出す方針を貫いてほしいと望んでいる。そうすれば、記事の鮮度が落ちることも避けられようし、また書評や講演が集中することも防げるのではないだろうか。

◇  
以前の「所報」が行きつまった原因の一つに「敬老精神」が濃厚であったことを挙げ得る。当時の長老たちの文章をむやみに集めようとして、原稿の集まり方が悪くなり、それが紙面の動脈硬化につながり、挙句の果てに廃刊へと追いこまれた。その点で、この第二号はたいへん好い方に向つたと言える。試みに執筆者の年令を数えてみたところ、四六歳と若干の端数が出た。第一号では五三歳余りであった。その違いが一号と二号との紙面にそのまま出ているように思う。ついでながら、本所の研究部門全員の

単純平均年令は四六・五ばかりであり、この号はほぼそれと同じである。これをもつと引下げたら、もう一つ違った趣きが出てくるはずである。しかし、現在の本誌の建前からゆくと、第三号では逆に平均年令が上向くことが予想される。そんな逆戻りを避けるために、これからは、例えば「共同研究のうごき」は、班長の公式報告だけでなく、若い班員からの批判的意見をのせるとか、また若い層の意見を引き出す場を「私の考え」のほかに、何か設けるとか言ったことなども考えてみた。

◇  
「書いたもの一覧」についてのお願ひ。単行本のばあいは発行所と発行月を、雑誌のばあいは巻号と発行月、あるいは発行月号（たとえば一月号といったように）をお書き下さるようお願いいたします。雑誌の発行月号が実際の発行月と違っているばあいは、発行月号の発行月によって統一させていただきました。たとえば、実際には二月の発行であっても、一月号は一月の発行として取扱わせていただきましたので、今回の『人文』第二号の「書いたもの一覧」（一九七〇年七月～二月）からは一九七一年一月号の分はすべて、次号にまわさせていただきます。

編集委員

(日) 飯沼 二郎

(東) 藤枝 晃

(西) 中村賢二郎